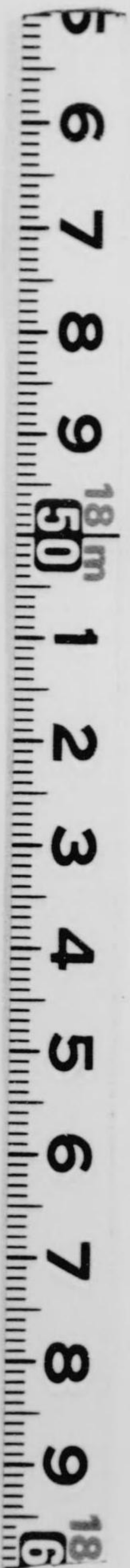


362
139



始



36.3.23

362-139



倫敦大學教授

著 エドワード・シヤキ・シン

富田

法學博士河上肇序

法學博士伊藤真雄譯

都 京

弘文堂書房

大正

8. 11. 28

内交

譯者序

一九一二年末より倫敦大學に於いて、キナン教授の經濟學講義を聴き、獲る所尠からず。超れて一九一四年世界戰爭勃發の少前、教授は一年級に對する講義の要綱を「富」——經濟的福利の原因に關する要説——と題し之を公刊せられたり。一日教授と會談の折、余は若し餘暇を得ば、之を譯出して我國讀者に紹介せんことを語りたるに、教授は悦びて之を援助せんことを約し、且成るべく之を實行せんことを望まれたり。仍て余は間もなく之に着手し、之に關して教授を煩はしたることを尠からざりしが、翌春歸朝の途上船中にて其の一部分を粗譯し得たれば、尠かに一兩年中には之を完成し得んかことを期待したり。然るに、歸着と同時に、圖らずも余の職務上の境遇に急激なる變化起り、爾來纔か

に夏季休暇の一部の外は纏りたる餘暇を得ざる身となり、その翌年に至り辛くも全部の粗譯成りしも、訂修の暇なきため空しく匣底に藏するこゝろ久しかりき。然るに其間、教授は常に甚大なる援助と奨励とを寄せられ、又先輩河上教授も、一日も早く之を成就せしめんとして、尋常ならぬ助力と鞭撻とを與へられたりしも、余の菲才は唯だ益々其の難業なるの感を深くするのみにて、未だ容易に完成すべくもあらず。嘗て河上教授の寄せられたる一書中にも、『キ、ナン氏の「富」は、熟讀すればするほど、力のある其代り六ヶしき著述にて、之を正確に譯出致候事は容易ならざるの大事業と存申候。過日來その第一章を繰返へし通讀致候に、簡単に記述しある其中の一節も、同氏の *A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy from 1776 to 1848.* には三十頁にも相成居候次第にて候へば、一字一句の譯出にも兎角著者の原意を損するの恐有之、又

氏の論文集 *The Economic Outlook* を着るも、「富」一冊に收めある議論乃至其全體の構造は、氏にこりては由來する所頗る久しきものなりと推察致申候云々』と言はれたるを見るも、其の遅延は必ずしも怠慢にのみ因るに非ざるを知らん。されど、他方には、之と共に開始したる世界戦争の今や已に終りを告げたるを顧みれば、此上更に遷延の罪を重ねんよりも、寧ろ之を此儘に公刊して、大方の叱正に俟つ方、却て之が完成を期する所以たらんかと思ふに至り、終に未定譯稿も謂ふべき態ながら、敢て之を上版するこゝろせり。若し夫れ讀者に對し幾分にも貢獻する所あらば、そは悉く兩教授の賜にして、余の満足無上なると共に、譯文の澁晦拙劣なる甚だしく原著の價値を毀傷し、加ふるに誤謬遺漏の必無を期し難きは、全く余の罪にして、深く兩教授及び讀者に謝する所なり。希くは、大方の叱正を吝まず、渉たる此小篇を研磨して他山の石たらしめ

んミ欲する微衷を援けられんことを。

茲に、キヤナン教授並びに河上教授の懇篤なる好意に對し、深厚なる謝意を表す。

大正八年九月

伊藤眞雄

序

キヤナン教授の『富』の原本が公にされたのは、今より五年前の大正三年であるが、當時私は文部省留學生として倫敦に滞在して居た。世界戦争勃發の爲め、急に伯林を引き上げ、様々の動搖の中を無事英國に到着したのは、同年八月十九日のことである。まだ下宿屋にも落ち付き兼ねて居た其月の三十一日、私は議會の傍聽に出掛け、その歸りに議事堂の附近なるキング書店に立寄つたが、それが即ち『富』の發行所であつたので、私は直ぐに之を新刊書棚に發見するを得た。然るにキヤナン教授に就ては、私は、其著作に成る『一七七六年より一八四八年に至る英國經濟學上の生産論及び分配論の歴史』や、其編纂に係るアダム・スミス氏『諸國民の富の性質及び原因に關する一研究』の校訂本に依つて、豫ねてより其の

忠實嚴正なる學風を窺ひ知り、竊に氏を以て敬服すべき經濟學者の一人なりと爲して居たので、當時私は直ちに一本を求めて下宿屋に立ち歸り、早速之を一讀したと記憶して居る。少くとも、歸朝以來今日に至る迄、絶わす之を座右に置いて屢々自分の參考に供し、又他人より經濟原論に關する簡單なる綱要書を尋ねらるゝ毎に、最良書の一として常に之を推薦し來りたるは、間違なき事實である。されば學友伊藤教授が之を邦譯せんことを企て居らるゝを聞くや、私は之を以て學界の一慶事なりとなし、其の一日も早く成就されんことを希望するの傍ら、一には原著者の學恩に報るんとするの意志ありしを以て、私は進んで多少の協力を爲すことを吝まざりし者である。併し其結果より見れば、私の助言が却て譯文の煩を爲つたことも、恐らく少くは無いであらうと思ふ。今や邦譯印刷成り、將に世に公にせられんとするに當り、原本及び譯本に對する余の因

縁を一言し、以て序と爲すことと爾り。

大正八年九月

河上肇

2

著者序

經濟學にこり眞に根本的なる問題は、吾人の總てが、全體として、現
狀の如く裕福なるは、又は貧乏なるは、言ふも可なり。果して何故なる
か、又吾人の内には普通よりも裕福なる者あり、又普通よりも貧乏なる
者あるは、果して何故なるかに在り。

余は信ず、斯かる疑問に對する答案は甚だ明白且容易にして之に關し
一般的研究を爲すの必要毫も無し。爲せる世上の考こそ、實に少からざ
る害悪を爲したるものなる事を。吾人は、若し或人が或機關車の缺點を
説明して之が救濟法を講ぜん。自稱しながら、其人は實は未だ曾て機械
學を學びたることなく、機關車の構造及び作用に就いて全く無知識なる
事を知らば、吾人は決して之を忍恕すること無かるべし。現在の經濟組

織は、之を機械に譬ふれば、機關車なごよりは幾層複雑微妙なる機械なり。然るに、其の作用の或不完全が特に顯著なるや、毎に吾人は、機械の作用の理論に關し毫も一般的知識を有せざる人々より提出せらるる、之が原因及び救済法に關する種々なる提言の爲に悩まざる、と甚だし。其の職業にこそ頗る卓越すれ、經濟學の根本知識に至つては毫も之れを有せざる人が、恰かも機關車の運轉車輪より其の重量を減じて廻轉を一層容易ならしめなば大に機關車の効力を増加すべし、なき言ふも同様な提言を爲すことあるは、吾人の屢々見る所なり。而して有力なる雜誌の編輯者は、自己の意見の發展を助くるが如き寄書は喜んで之れを採録するものにて、且公衆は初めの程こそ左して之に重きを置かざれ、而かも本職の經濟學者が、恰かも天文臺長が世界は扁平なりと主張する如き論者には答辯を欲せざるも同じく、之に對して辯駁を發表することこそ好

まさるが爲に、公衆は遂に此種の俗論を確信するに至るなり。

茲に必要なは、愚なる提言に對する辯駁に非ず、人々良く經濟てふ機械の本質及び作用に關する知識を完備して、斯かる提言が採擇を得るの可能無からしめ、其結果、斯かる提案の出現を絶無ならしめん事あり。されば、余が本書に於いて、讀者には甚だ明白にて説述の要なしに見ゆる事をば、固執論述して讀者を倦ましむる場合には、須らく讀者は、讀者には明白に見ゆる理論とは相容れざる理論に基きて、或重要な傳道的議論が行はれ、又は或重要な改革に對する或反對論が行はれつゝある事を、知れりや否やを自問せられんことを望む。余は其の實例を擧ぐることを故らに差控ふべし、何こなれば、余は種々なる傳道論者並びに其の反對論者の中、本書は彼等の信條に危険なりとて之を敬遠する者あらんよりは、寧ろ彼等の總てが皆之を讀まんことを希へばなり。

教師が學級用として完全なる教科書を索むるは常の事なるが、經驗ある教師は、本書の説述が餘り明瞭なりて苦情言はるゝことは恐らく無かるべく、寧ろ余の所論は初學者には難解に過ぐるもの多しと言はるゝならんと思ふ。然れども、余は初學者には唯だ平易なるものゝみを教へんことを政策を疑ふ者なり。吾人は事物を在りのまゝに採らざる可からず。而して、或他事に於けると同じく、經濟學に於いても亦、其の基礎たる部分が最も困難の部分なることを認めらるゝするも、そは決して、何等の基礎無くして建築に努むる事の理由は爲らざるなり。されば余は、本書はたゞ難解にても、高等なる學校の教師及び學生に依り、又講義や學級に列席せずして實地の經濟問題を論ずる學力を増進せんことを讀者に依りて、有用と認められん事を希望す。本書は、兎に角、余が一八九八年以來倫敦大學の經濟學及政治學學校に於いて、初年級の學

生の爲になしたる毎學年の講義より、漸次に進化したるものにて、其間一年を以て、其の内容又は説明の排置に、著しき變更を加へざりし年は無かりしなり。

余は嵩高き大冊を好まざる人々に切なる同情を持ちて、本書をば出來得る限り簡單ならしめんことを努めたり。かの勞賃・利潤・及び地代に關する議論の大部分は、今より百年以前にありては或部分的重要な有したるものなれども、今日は既に陳腐に屬せるものなれば、此等は經濟學史に關する著書に讓るべきなり。尙其他種々なる陳腐の問題を省略し、通貨及び租税に關する問題の如く、寧ろ特別の論文に讓るを可とするものは之を除外し、又細説及び描畫的例解も之を割愛し、之に依りて、余は、適度の長さの一般論文には屢々無視せらるゝ所の、甚だ根本的な諸問題を論ずるの餘地を作らんことを圖れり。斯くて、余は特に、所得の不平

等が遺傳性を有するにこそ、女子の儲けの憐れなるにこそ、及び異なる『國』又は『國民』の富に差異あるにこそに關し、殊更に論及する所ありたり。

一九一三年十一月

倫敦大學・經濟學及政治學學校

エドウィン・キャナン

目次

第一章 經濟學の研究題目……………一—三四

經濟學の研究題目たるものは、凡そ經濟學に於いて之を論ずるを以て最も便利とするものは、總て是なりと解せざる可からず。此問題は、學問の種々なる分科をば如何に分界せば最も便利なるかの問題に歸着するものにて、之が決定には、實際上普通に研究せられ居る所のものが、良好なる指南となるものなり。……………一—二

往々、國民の富なるものに特別の注意を拂ひたるにこそあり、然れども、經濟學は國民の富に關する學問なりと定義せられたる場合にも、尙實際に於いては、其他の事項が之に包括せられたるにこそ多く、随つて、富として普通に論ぜられたる所は、一般人類の富にてありしなり。……………二—四

富てふ言葉は、初めは人類の或有様又は状態を意味したるものなり、然るに其後、殊に形式的定義に於いては、人をして其状態に處するを得せしむるものと想はれたる物に對して

も亦、之を適用せらるゝに至り、而して時の或一點に於いて占有せられたる物の集團、及び時の或長さの間に生産せられ又は入り來る物の集團の、孰れにも曖昧に用ひらるゝに至れり。……………四一—

然るに第十八世紀の央以來は、經濟學の説明の大部分は、上述の物の集團中、後者に關するものとなり、而してそれは初めは「生産物」と稱せられしが、比較的最近に至りては「所得」と稱せられたり。……………六一—

生産物又は所得なるものは、之を定義し又は測定すると容易に非ず。而して之を測定せんとしたる努力の結果は、遂に經濟學の研究題目として、「効用」又は「充足」なるものを以て之に代ふるに至り、非効用及び非充足は、消極的のものとして認められて積極的の効用又は充足より排除せられたり。若し吾人にして大體此結果を認容し、而かも尙經濟學の定義中に「富」なる語を保存せんか、即ち富なる語は、人類の或有様又は状態を表はしたる舊意義に復歸したるものと認めざる可からず。……………六一—二五

然るに、此意義に於ける富と其他の種類の福利との間に、區別を設くるに甚だ困難なり。交易し得るてふ事は、之が區別標準として未だ不十分なるを免れず。結局最良なるは、富とは

物質的利なりと言ふに在り。物質的福利は漸次に推移して終に非物質的福利に到るものにして、兩者の分界は不明なれども、而かも此事は、富の研究の爲に學問の特別なる一分科を有するの便利なる事を妨ぐるものに非ず。……………二五—三四

第二章 孤立人及び社會に取りての富の根本的條件……………三五—七一

何人も實際孤立して生活するものに非ず、然れども、吾人は先づ、孤立人に取りての富の條件は如何なるものなるかの研究より始むるを可とす。孤立人の富は次の諸條件に依りて定まるものなり。

- (一) 其の生理的要求に比して、其の固有せる天賦の力の大小……………三五—八
- (二) 過去に於いて其の力及び環境の改良を行ひたる程度。彼は單純なる實習に依り又思慮ある自習及び研究に依りて、其の力を増進するを得べく、又「善良なる耕作」其他地面の有利なる變化に依り、及び有用なる道具・建物等の製

作に依りて其の環境を改善するを得べし。但し、斯かる改良を總て合計し、既知の或標準に依りて精確に之を測定し得べき總額を見出す事は不能なり。且又實際行はれたる變化が、其當時は改良に至當に認められたるものなれども、知識及び其他の事情の變化の爲に、其の効用を消失するに至ることもある可きなり。……………三八―四三

- (三) 其の力並びに環境を使用するに當りて行ふ判断の良否。
 勞働は皆害悪には非ず、然れども、或特定の目的の達成の爲に費さるゝ勞働の量は、之を最小限に止まらしめんとは望まじき事なり。勞働の種類異なるに従うて其の快適の度に差異あり、而かも如何なる種類の勞働にても、餘り長く之を行ふときは皆不快なるものなり。故に孤立人は、其の力の分配並びに其の環境の使用をなすに當りては、單に種々なる財に對する欲望の急度及び之を獲るに要する時間に就いて考慮するのみならず、更に又之に要する勞働の種類をも顧慮せざる可からず。又彼は目前の利益と永遠の利益とを比較して、其の一方の爲に他方を如何程まで犠牲にす可きかを決定することを要せん。……………四三―五四
- (四) 彼が一層重要なりと認むる或非經濟的目的の爲に、或可能なる富を犠牲に供するを

可と認むることの多少……………五四―五

孤立人の富に關する此等の諸條件は、社會に關しても亦存するものにして、即ち社會は、下記の諸條件に依りて、或は裕福たり或は貧乏たるべし。

- (一) 社會の人々が其の生理的要求に比して天賦の力を有することの大小……………五六―七
- (二) 人的性質・蓄積されたる知識・及び物質的環境の上に行はれたる改良の多少(現在に於ける効用を標準として測りたる)……………五七―六三
- (三) 現在及び將來の種々なる目的の間に努力を分配することの適否、及び努力の結果に對して努力の不快を較量することの適否……………六三―八
- (四) 一層重要と認むる非經濟的充欲の爲に、富を故らに犠牲に供することの多少……………六八
- 以上は孤立人と共通の條件なるが、社會の富は、更に又次の諸條件にも懸るものなり。
- (五) 人口の年齢の配合が、生産的努力に適することの多少……………六八―七〇
- (六) 協働を利用することの多少……………七〇
- (七) 人口數が最も好適なる大きさに接近せる程度……………七〇

第三章 協働、即ち合力及び分業……………七二―九一

各人各別にては全く不能なるか又は十分迅速に爲し難き或一事を、多數人が連合して之を行ふ場合には、之を「單純協働」といふ。……………七二

「複雜協働」即ち普通に「分業」と稱せらるゝものは、多數人が、各自異種の仕事を爲して、或結果を生ぜしめんが爲に互に結合する場合なり。分業は種々なる利益を有す。即ち、

(一) 分業は、世界の種々なる部分の有する種々なる性質を、有利に結合するを得せしむ。物に依りては或場所に限りて得らるゝ物あると共に、又之が生産を不均等に分布するに因りて得らるゝ物も多し、是れ或地方の人民は、特種の生産物をば其の消費以上に多く生産するとあると共に、他地方の人民は、其の消費以下に少く之を生産するとある所
以なり。……………七二—九

最良の産業分布は、總ての必要なる物全體より觀て、最も容易に之を生産するを得せしむるが如き分布是なり。而かも之に關する實際上の問題としては、常に只、既に行はれある分布に如何なる變更を加ふるを可とするか云ふ事であり。……………七九—八四

(二) 分業は、個人の相異なる天性を十分に利用するを得せしむ。……………八四—六

(三) 分業は、各職業に對し一層大なる熟練及び技能を得るとを得せしむ。……………八七—九

(四) 分業は、書籍及び口授に依りて一代より後代へ移傳せらるべき、智識量の獲得并びに保持を容易ならしむ。……………八九—九〇

(五) 分業は、道具及び機械の一層間斷なき使用により、之を節約するを得せしむ。……………九〇—一

第四章 人 口……………九二—一三八

分業無からば、大なる人口は即ち一人當りの土地少きを意味するものなれば、大なる人口と富とは互に兩立し得ざるものならん。然れども、人口の數大なるほど、協働より得べき利益は益々大なるものなり。故に、一人當りの土地少きの不利は、協働より生ずる一層大なる利益に依り之を償ふて餘りあるを得べし。……………九二—五

古代の世界人口に關する論争は、人類の生殖力の缺乏の外何等の制限無き場合に於いて、人口の増殖すべき暴進的速度に注意したり。其結果、ウタレーヌ氏をして、理想郷なるものは人口過集のため到底不可能なることを主張せしむるに至れり。……………九五—一〇〇

マルサス氏は、單に人類の出産力のみを關する限り、人口は二十五年毎に倍加し得るものなるに、而かも生活資料の年々の供給は、二十五年毎に同等額を増加する以上には迅速に増

加せしめ得ざるものなれば、生活資料供給の困難は常に存在せざる可からずと言へり。されど氏は、何故に、人口大なる場合には毎一人に對する生産額は、人口小なる場合よりも少かるべきかを説明せざりき。……………一〇一七

氏の遺論は「收穫遞減の法則」なるものに依りて補はれたり、此法則は、テュルゴー氏が其前既に説きたる所なれども、其の初めて顯はれたるは、一八一三—一五年に於いて農業保護に關する論争の行はれたる間にあり。此法則の最も未熟なりし頃は、人口の増加は、耕作をば劣等の土地に擴張するを必要ならしめ、又既耕の土地には一層集約的にして一層生産力少き耕作法を採用するを必要ならしめ、爲に農業の收穫の現實の減少を起さしむるものなる事を主張したり。……………一〇七—一五

されど、此法則が比較的に學問的に形式を探るに及びては、唯、斯かる結果を生ずるの傾向ありと言ふに止め、且此傾向は「改良」によりて一時破らるゝともあり得べき事を認容せ而して、斯く説かば以て人口の増加は害悪なる可き事を示すに足ると信ぜられたり、蓋、人口の増加無からば「改良」は每人の生産額を増加すべきものと見做されればなり。然れども吾人は、若し人口が斯の如く増加せざりしならんには、果して如何なる改良が行はれ得た

るべきか。知ることを得ざるべし。加之、農業の收穫が減少するときは、農業をも含める總ての種類の産業の收穫が悉く減少すべしと見做し得べき理由は無く、随つて又、農業の收穫を減少するの傾あるものは、皆總ての産業全体の收穫を減少するの傾ありと見做し得べき理由も無きなり。……………一一五—一二

製造業にありても亦、農業に於けると同じく、總生産額の増大には之が利益及び不利益を伴ふものなり。農業と製造業とを別々に觀、又は双方を併せて觀るも、其の總生産額が一層大なる場合に比し又は一層小なる場合に比し、その就れの場合に於けるよりも労働の生産力は一層大なりと言ひ得べき或點の存在するものなり。其の結果として、凡そ如何なる時にありても或一定時にありては、過小にも非ず又過大にも非ざるべき或一定の人口數なるもの之ありと言ふことを得ん。而して人口數が、此點以上又は以下の就れにもせよ、此點より離れなば即ち労働の生産力に不利なり。されど、此點は事情の變化に因りて絶えず變更されつゝあるものなり。……………一二一—五

收穫遞減の法則は、如何なる場合に於いても常に眞なるやうに、之を言表はさる可からず。……………一二六—八

第五章 社會的制度 一二九—七三

富を獲んが爲には、社會の組織が善良なるを必要とす。現在の状態は、完全を距るこゝ
遠しと雖も、亦決して渾沌たるものには非ず。現在の組織は種々なる制度を基礎とせるもの
なり。..... 一二九—三六

家族制は、若年者に勞働の慣習を與ふるものにして、又人々を種々なる職業間に配置するも
も大部分は家族内に於いて決定せらるゝものなり、又家族の經濟的協同は人口に或影響を及
ぼすものなり。..... 一三六—四〇

動産及び住所の財産權は、物の占有が横奪せらるゝことを嫌惡することより、發生したるも
のなり。土地財産權は之よりも後れて發生したるものにして、初めは領土主權と區別し難
きものなりき。..... 一四〇—八

財産制の效果は、種々なる破壊的行動を防止し、又生産的行動を爲すを以て人々の利益
たらしむる事に在り。又財産制は人々の協働を餘儀なくせしめ、且協働をして個人間の無數
の別々の合意に基くことを得せしめて益々協働を容易ならしめ、又更に進んでは、世界全體を

支配する權力の存在せざるに拘らず、而かも能く世界に亘れる協働の行はるゝを得せしむ
るものなり。..... 一四八—五四

國家なるものは、初めは人々の集團を代表したるものなりしが、終には領土的のものとな
れり。國家は、時としては互に戰爭を爲し、又平時にありても往々相互間に非社會的なる政
策を行ふとあれども、而かも大體に於いては、其の一般の政策は協働的政策なりと言ふことを
得べし。..... 一五五—六〇

國家の内部にありては、國家は經濟組織に於ける重要な一要件たり。自由放任主義なる
ものは、未だ曾て實行せられたると無く、又決して實行せられ得ざりしものなり。... 一六〇—五
國家は交通手段及び其他種々の勤勞を供調するものなり。..... 一六五—七三

第六章 需要の支配力 一七四—三二

現今の諸制度の下に在りては、人々が勞働を爲し又は其の財産の使用を許すは、直接に自
己の欲望を充さんが爲には非ずして、貨幣を得んが爲なり。..... 一七四—九

貨幣を得んが爲には、初めは、直接に消費者に對して或は物件即ち「貨物」を賣り、或は勤勞を賣り、或は貨幣の支拂に對して土地・貨幣・又は其他の物件を貸したるものなるが、やがて、一方には勞働者並びに所有者と他方には消費者との間に仲介者が現はるゝに至り、而して其の職業に依つて得たる利益をば「利潤」と稱し、利潤は之を其の「資本」に對する百分率にて計算するを普通とせり。是に於いてか遂に、現今の組織は之を「資本的」と稱せらるゝに至れり。然れども、斯かる仲介者は、生産物の上に眞の支配力を有する者には非ずして、彼等の行爲は、其他の者の行爲と等しく、需要に依りて支配せらるゝものなり。……………一七九—一九二

價值と効用とは區別せらるゝを常とす、然れども、人が其の供給せらるゝ貨物の小増加量に對して支拂ふ額は、其人に對する其増加量の効用に依りて異なるものなるの事實を見れば、此兩者の間には密接なる關係あり。……………一九二—二〇四

されば、單一人・相均しき欲望並びに資力を有する多數人・及び各自の欲望に比例せる資力を有する多數人に關して言ふ限り、欲望は生産を支配すと言ふことを得べけん。然れども、欲望を異にし且其の資力は欲望と一致せざる多數人の場合にありては、吾人は唯、生産は需要に依りて支配せらるゝと言ひ得るに過ぎず。……………二〇四—二一〇

需要は、欲望と共に支拂の能力を假定するものなり。需要は、物に依り異なる「弾力性」を有す、而して或物の價格が、販賣の爲に提供せらるゝ其物の量の變化と共に、大又は小なる騰貴若しくは下落をなし、以て生産の増加を奨励するも或は強く或は弱きの差を生ずるは、此弾力性に從うものなり。……………二一〇—三

第七章 將來に對する準備……………二二二—二五九

社會は、將來の爲に幾何の準備をなすべきかを、意識的に決定するの手段を有せず。其の行ふ實際の準備は、主として、「貯蓄」より生ずる所の、一定の財に對する需要に應じて行はるゝものなり。されど、單に後日之を消費し得んもの願より行はるゝ貯蓄の如きは、唯だ少額に過ぎず。……………二二二—三

現今の状態にありては、貯蓄の大部分は利子を得んが爲に行はるゝものなり。而して一定歩合の利子が貯蓄を奨励することの大小は、

- (一) 將來を改善せんと欲する希望の強度……………二三一—二四一
- (二) 貯蓄の能力……………二四一—四

に依りて異なる。

或一定の貯蓄の希望及び能力にして存する以上、貯蓄の額は、利子の歩合に依りて支配せらるゝものとす。……………二四四―五

若し總ての他の變化を除外せば、利子歩合は、唯貯蓄の額の多きほど之に従うて下落するのみなるべく、而して其の下落の程度は、各利率の下に於いて貯蓄を運用し得べき範圍の大小に依つて定るべし。……………二四六―九

然れども、人口数の増加は之と反對の作用を爲すものなり、又發明及び發見は、貯蓄を要すべき生産方法と貯蓄を要せざる生産方法との相對的便益を常に變更しつゝあるものにて、其結果、或は利子歩合を下落せしめ或は之を上騰せしむるの傾あり。……………二四九―五三

個人間に於ける實力の不平等なる事は、社會の實際の總貯蓄額と、社會が完全なる判斷に依らば貯蓄すべき額とが、互に相一致するとの妨碍原因を成すものなり。……………二五三―七
貯蓄は、將來の爲に爲さるゝ準備の全體を構成するものには非ず、蓋、貯蓄は單に財産となり得べき物にのみ適用せらるゝものなればなり。……………二五七―九

第八章 繼續的需能力、即ち所得……………二六〇―三〇三

所得は需能力の大なる根源なり。所得は、之が收得者に入り來る所の貨幣なりと解せらる。

然れども、評價容易なる場合には、實物收入の貨幣價值をも之に加ふるを常とす。……………二六〇―八

明白なる盜奪に依る收得物、及び相續并びに贈與に依るものは、之を所得の中に算入するゝと無し。……………二六八―七五

財産の所有より生ずる所得は、必要なる諸費用を控除したる後の規則正しき收入より成るものとす、而して普通、此等の諸費用は、其財産を損耗なく維持するに必要なる總ての費用を包括するものと解せらる。……………二七五―八

されど、之が爲には幾何を要するものなるかは、之を計算するも困難なり、而して實際にありては、鑛山又は終身年金等の場合には、此主義はあまり適用せられず。……………二七八―八七
勞働より生ずる所得は、必要なる繼續費を控除して計算せらる、然れども、教育訓練等の準備的諸費用は之を控除せざるを常とす。……………二八七―九一

團體の所得は、總ての所得の總額を計算するに當りては、之を個人の所得の中に加算し得る場合も多けれども、國家及び其の地方團體の所得と認めらるゝものゝ如きは、之を加算せざるを可とす。……………二九一―九

財産を有する者は、其財産を處分して其手取金を消費せんと欲する場合には、一時、其の所得の與ふる需要力を起して需要の力を行ふを得れども、斯かる消費の總額は左程多大なるものに非ず。又所得の與ふる需要力が、往々贈與及び給與に依りて他人に移轉せらるゝとあれども、此場合は代理人に依つて之を行ふものと認むるを得ん。斯くて、需要力なるものは、此等多少の變化はあれども、要するに所得と略ぼ比例して分配せらるゝものなり。……二九九—三〇三

第九章 所得の分類 ……三〇四—二一

所得を分ちて勞賃・利潤及び地代となしたる第十八世紀の英國の所得分類法は、其時代及び其所に適合したるものなり。アダム・スミス氏は努めて之を精確ならしめんと欲し、勞賃は之を勞働より生ずる所得となし、利潤は之を資本より生ずる所得となし、地代は之を土地より生ずる所得となせり。……三〇四—一四
氏及びその繼承者は、氏の所謂「企業家」なる者は、其利潤をば勞働と資本との双方より得るものなるの事實より起る困難を回避したるが、就近に至りて、舊來の「利潤」は資本家の「利子」

と企業家の報酬とに分たれ、從來の三種分類法は四種分類法となるに至れり、然るに同時に又、マーシヤル氏が「准地代」なるものを案出したるに由りて、利子(新意義の)と地代との區別が、從來の如く判然たらざるに至れり。……三一四—二〇
是に於いてか、今や所得を分ちて、財産より生ずるものと勞働より生ずるものとに大別する二種分類法を採り得るに至れり。……三二〇—一

第十章 所有者と勞働者との間に於ける所得の分割 ……三二二—三六

所得の分割の研究は、種々なる所得即ち各種類の所得の相對的大さの研究に外ならず。……三二二—四
平均所有者が、平均勞働者に比して、割合に大なる所得を得つゝある事は、必ずしも財産が全體として總所得中より一層大なる割合を受けつゝある事より來る必然の結果には非ず。……三二四—六
此問題は、單位の價値の問題には非ずして總體の價値の問題なり、随つて、勞働又は財産

の全體の量の變化は、其の單位の價値の變化と同じく、之を考量せざるべからず。労働と財産との供給量の相對的變動の結果の如何は、兩者に對する需要の彈力に依つて異なる。而して需要の彈力の變化は、所得の増減・流行又は趣味の變遷・及び發明并びに發見より起るとあり。

過去に於いては、財産の分け前は、労働の分け前よりも相對的に増加したりと言ふを得べし。……………三三三—三三六

第十一章 財産の所有より生ずる所得……………三三七—三四七

財産より生ずる所得の不等の、最も有力なる第一の原因は、人々は遺贈及び相続に依りて不均等なる額を受くるものなるの事實にあり。法律及び慣習は、所有者の死亡に當りて其の財産の分散を奨励することあり、或は又之を阻妨することもあり。……………三三七—三四三
財産所得の不等の第二の原因は、貯蓄の不均等にあり、而して貯蓄の不均等は、主として、貯蓄を行ふべき本源たる所得の不等に因り、又一部分は、各自の要する費用の大小にも因る。……………三四三—三四六

第三の原因は、一旦取得したる財産の價値の偶然的變動にあり。……………三四六—三四七

第十二章 労働より生ずる所得……………三四八—三八四

労働より受くる所得の差異は、全然價値の問題なるものに非ず、蓋、爲されたる労働の量も亦其の一要因を成すものなればなり。而して労働の量は、勤勉と能力とに依りて個人毎に相異なる。……………三四八—三四九

普通の勤勉并びに能力を有する人々が相異なる職業より得る所の所得は、其の爲したる労働の價値に依りて定まるものなり。労働は價値を創造するものには非ず。或は、労働者間の競争は各種職業の比較的人數を調整し、以て、労働の結果をして總ての異種職業の普通人に正に同一報酬を齎すべき價値を有せしむるに至るものなりと認むるを得ん。然れども實際にありては、次の如き諸現象を見るべし。……………三四九—三五三

- (一) 右の如き平準を離脱する場合常に多く、而かもそが長きに亘る場合もあり。……………三五四—三五七
- (二) 非凡の有能者に大なる報酬を與ふる職業は、普通人に對しては他の職業よりも却て小なる報酬を與ふるものなり。……………三五七—三六〇

- (三) 不快なる職業は、愉快なる職業よりも報酬多し。……………三六〇―
 - (四) 繼續不規則なる職業は、其の實行せらるゝ期間に對する報酬は比較的高きものなり。其の不確實なる事を以て不利と認めらるゝ職業にありても、亦然るを常とす。…三六一―二
 - (五) 高價なる教育を必要とし、又は長き間儲け仕事に就くとの延期を必要とする職業は、勞働生涯の間、比較的高き所得を齎すものなり。……………三六二―三
- 若し以上を以て事の真相を盡せるものとせば、總ての職業の儲け高が均等となるには非ずして、總ての職業の全利益が均等となるものなりと言ふ、ことを得ん。然れども、以上は未だ真相を穿てるものに非ず、何となれば、假ひ勞働の儲得中より訓練教育の原費として適當の額を控除すること、而かも尙ほ高價の訓練を必要とし又は長き間就職の延期を必要とする職業は、差引き多大の利益を有すればなり。而して此は、子供の養育は營利上の問題には非ずして、家族・慈善家・教會・及び國家の手に委せらるゝものなるの結果なり。……………三六三―三七一
- されば、勞働の儲得の差異は、それが單に天性の遺傳のみに因る場合に生ずべき差異よりも一層多く遺傳的なるものなり。……………三七二―
- 男子と女子とは相異なる性質を有し、又女子の雇傭の範圍は種々の理由より男子の其れよりも狭小なるの結果として、男女の報酬の間には著しき差異あり。……………三七二―八二
- 要するに、遺傳の差異と男女の別とは、所得不平等の二個の最大原因なり。……………三八三―四

第十三章 個人の所得と個人の富との

關係……………三八五―四二二

- 所得は、同一の時及び所に生活する「獨立」せる人々の富の概略の標準として、屢々採用せらる。然れども、
- (一) 所得なるものは、總ての物質的利益を包括するものに非ず。此外に尙、所得者が自分で働き又は自己の財産を使用するの結果として受くる或物質的利益もあり。……………三八五―七
 - (二) 所得は、全部其の受得者の利益の爲にのみ用ひらるゝものに非ず。蓋、彼は、其の一部分は之を其の家族又は其他の者の「要求」を充す爲に費し、又他の一部分は之を非經濟的目的の爲に費すを普通とすればなり。……………三八七―九一
 - (三) 或期間の所得は、其期間に於ける貯蓄をも包含するものなり。而して貯蓄は消費の如く直接に欲望を充すものに非ず、隨つて其期間の富は、其期間の全所得よりも寧ろ其期

- 間の消費によりて測定せらるゝものなり。……………三九一—四
 - (四) 人々は相異れる欲望を有するものなれば、或一定額の所得が其の富を増進することは人に依りて著しく大小の差あることあり。……………三九四—七
 - (五) 人々は所得の管理の能力を異にするものなれば、或人は他人に比し、或一定の所得「より得る所一層多き」ことあり。……………三九七—九
 - (六) 所得は、甚だしく相異れる種々なる状態の下に得らるゝものなり。……………三九九—四〇一
 - (七) 所得の増大と共に、所得の増加分の効用は遞減するものなり。……………四〇一—七
- 以上の七事項は共に、全體上、所得の不平等を緩和するものと言ふを得べし。而してそれは、就中第七の事實の甚だ有力なる影響に主因するものなり。……………四〇七—八
- 其の生活せる時を異にし、又は時を同うすれども氣候等其他の状態を異にせる人々又は團體の富を比較する場合には、所得は、之が標準として、時及び所を同うせる個人及び團體の富の比較の場合よりも、一層其の効少し、而して時の隔り及び所の相違の多きに從うて、益々其の効少きものなり。……………四〇八—一二

第十四章 國民の富……………四一三—五〇八

一國民の富は、其國民の富の總額なりと認められたる時代あり。然れども、現今の議論においては、其國民の平均的又は代表的なる屬員が富を有すると多きか又は少きかに依りて、國民の富は大又は小なりと見做せり。現今の議論は、國民の屬員たる者は或地域の住民なりとし、而して其地域として論ぜらるゝものは、普通は一の關稅區域にして、必ずしも獨立國の領土には非ず、されど此は寧ろ偶然的なるものにして、根本的のものに非ず。……………四一三—二〇

國民の富の爲に重大なる必要事は金銀の獲得並びに之が保持にあること、及び此目的を達する爲には適當なる調節を行ふことを必要とするは、長き間普通に行はれたる考なり。而して最初に行はれたる計畫は、金銀の輸入を許し輸出を禁ずるの法律を制定する事でありき。然るに其後に至りて、金銀の獲得及び保持の爲に必要な事は、唯「有利なる貿易の均衡」を得るにありと論ぜらるゝに至れり。……………四二〇—三

此説は、次の如き種々の酌量を加へなば初めて眞理たりしなり、即ち(一)運搬の費用、(二)其他の勤勞に對する支拂、(三)財産の使用に對する支拂、(四)投資、(五)種々なる非商事的支拂、是なり。……………四二二—三四

若し、輸入並びに輸出の精確なる數額が知られ、又上掲の必要なる諸酌量の精確なる數額

が知られ得たらんには、大多數の諸國にありては、當時行はれたる如き種々の憂虞は除かれ
たるならん。然るに斯かる數額は之を知ると能はざりしが爲に、各國民は、輸出を奨励し輸
入を妨制すべき適當なる調節を行ふに非ざれば、其の貨幣を喪失するの危険ありと信じたり。

..... 四三五―七

終に、此等の調節は其目的の爲には全然無益なると覺らるゝに至るや、種々の禁止・關稅・

及び獎勵金の大制度が發達するに至り、而して此制度の撤廢によりて損害を受くべき當事者

の利益の爲に、更に「保護貿易論」なるものが發明せらるゝに至れり。..... 四三七―四〇

通俗の保護貿易論は、主として、保護は職業を與ふるものなりとの信仰より起れり、

然れども、此信仰は誤れる議論に基けるものなり。..... 四四一―八

比較的素養ある保護論者は、保護貿易は之を行ふ國をして優良なる産業を選択することを

得せしむと主張すれども、是亦覺束なきことなり。..... 四四八―五八

又保護は往々、一國をして其國以外に住める人々に課税するを得せしむとの理由より主

張せらるゝとあり。此は時に可能なることあれども、之を行ふの甲斐あるとは甚だ罕なり。

..... 四五八―七〇

又關稅政策の效果として、諸國労働階級の狀態の上に著しき差異を現はすが如きは、あり
難き事なり。..... 四七〇―二

諸國民の富の差異の原因を探究せんせば、先づ以て、甚だ小なる地域に住める小團體の
富の差異の考察より始むべし。..... 四七二―六

然る後、例へば英國内の諸州の住民といふが如き、比較的大なる團體の富の差異に就きて
考察すべし。..... 四七六―九二

斯くして知り得たる所を國民の場合に適用せば、諸國民の比較的富は、次の諸事に依りて
左右せらるゝものなる事を知るべし。

(一) 人民の先天的並びに後天的性質。..... 四九二―八

(二) 人民の職業。..... 四九八―五〇一

(三) 人民が國內及び國外に於いて所有する財産の價值。..... 五〇一―三

(四) 其國の新らしさの程度。..... 五〇三―八

目次 (終)

第二版に
附したる 著者の注意

余が一九一三年に本書第八七頁の終りに近き部分（本譯書第一五八頁の始めの部分）を書きたる當時にありては、何人も、戦争に對して準備する爲の總費用は却て「戦争そのもの、費用よりも甚だしく大なるに至り」たることを否認せんとする者無かりしならん。然るに、現下行はれつゝある戦争が實に巨大なる費用を要しつゝあるの事實は、今や余の言中「甚だしく」なる助働詞を、少くとも、變更するの必要あることを示すに似たり。然れども、讀者は、若し現戦争以前に一般に行はれたる制度が今後も尙繼續するものみせんか、其時に於ける戦争準備の費用は、決して舊來の如き規模に依るものには非ずして、社會が現に享けつゝある現代戦争の經驗の示す所に依り、從來に比し非常に優大なる新規模に依

るものなる可き事を忘る可からず。其場合に在りては、實に戦争準備に關する國際競争は、強健なる成人及び兒童の能率（戦争の仕事及び民族の繁殖に關する）の爲め缺く可からざるの必要を充したる後尙残れる人類の精力を、微塵も剩さず悉く之を吸収するに至らざる可きの理由、毫も之あらざるなり。此の如きは、恐らく——長き間に於いては——人民の嫌厭する所たるべきも、兎に角、諸國政府が其の人民に對して之を支持せざるを得ざるに至るべき理想たるべきなり。

一九一七年二月

「富」

第一章 經濟學の研究題目



經濟學の研究題目は即ち「富」なりてふことは、古來久しく認められたる所にして、今更之を否認すべき理由を見ず。少くも余は本書に於いて之を認容せんを欲するものにして、随つて余は「富は何ぞや」といふ問題をば「何を經濟學の研究題目とみなさば最も便利なりや」といふ問題と全然同一なるものにして之を論ずべし。余は茲に最も便利といふ、それは經濟學は學問の一分科にして、随つて之に包括せらるべきものは何なるかの問題は、學問の種々なる分科を如何に分界せば最も便利なりや、の問

題に歸着すればなり。

斯かる問題に對しては、著者又は教師が其の研究題目に適合せしめんと欲して豫め之が定義を穿索することよりも、寧ろ、彼等が實地に論述するもの、方が却て優りたる答案を與ふるを普通とす。故に余は先づ、實際上經濟學の著書及び講義に於いて普通の研究題目となり居るものは何なりや、といふことより論ずべし。

そは、第一に、人類によりて所有され又は享樂さるゝ或ものなることは疑なし。尤も經濟學が學問の一分科として特立し始めたる當時に於いては、經濟學者は、直ちに國民の富に關する論争に没頭し、「國民」(the nation)以外の團體に就いては果して之を論ずべきものなるや否やの疑問を起したること會て之なかりしものとす。現にステewart氏 (Stewart) は一七六七年に公にせし其の大著に題して「ポリテイカル・エコノミーの原理の

研究」(An Inquiry into the Principles of Political Economy) と稱したるが、茲に氏が

「ポリテイカル」(Political)なる語を用ひたる所以は、即ち氏が國民の富を論ぜんことを示すものなり。其の後十年アダム・スミス氏は、其の著に題して「國民の富の本質並びに原因の研究」(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations) としたるが、こはステewart氏のそれと同一名稱を附するを避けんと欲して、只之と同意語を用ひたるものならん。さり乍ら氏は其書中比較的一般的の議論を爲せる部分に於いては「國民」(the nation)といふ代りに屢々「社會」(the society)なる語を用ひ居るより考ふれば、氏に至つては已に其論述の範圍をば題目の字義よりも一層廣きものたらしめんと欲したると明かなり。其後の著者はアダム・スミス氏が *people* (社會)なる語を用ひたると同方法にて往々 *community* (社會又は團體)なる語を用ひ、又その對象とせる人類の總てを一體として論ずる場合には

「社會の富」(the wealth of the Community)なる語を用ひたり。

四

要するに從來凡ての經濟學者は、社會全體の富に就いて考ふるに共に又社會の内部に於ける諸階級及び個人の富に就いても亦之を考察したるものにして、其點より考ふれば、その所謂「ポリテュカル・エコノミー」に於ける「ポリテュカル」なる語の使用又は「國民」なる語の使用は、その眞意孰れも此學問をば單に國民の富の研究にのみ限らんを欲せしに非ざるべし。即ち經濟學の研究題目は、由來常に「一般人類の富」にてありしなり。

本來普通の英語にて「富」(Wealth)なる語は、人類の或有様即ち状態を稱したるものにして、例へばかの祈禱書中に「Grant him in health and wealth long to live」(健康に且富みて長壽ならしめ給へ)といへる國王の爲の祈禱にも見らるゝが如し。山なる接尾字は有様又は状態を示すものにして、随つて「富」なる語は、良好なる有様又は状態 即ち今日の英語にて言はゞ、繁

榮なる (prosperous) 有様又は状態を示したるものにして、恰かも「健康」(Health)なる語は治癒せる有様即ち病氣に罹らざる有様を示したるに同様なり。

然るに此語は、漸次、之が支那を有する者をして繁榮にて生活するを得せしむべき貨幣及び其他の具象物にも應用せらるゝに至れり。第十八世紀に於いて、或著者等は夫の従來行はれたる、國民政策なるものは其國土内に金銀の永久的増加を確保するの目的を達する様に之を講ぜざるべからず、この意見に對して抗論するの必要を認めたりしが、彼等は之を爲すに當りて、富は全然金銀のみより成るものには非ずして其他馬匹・家畜・家屋・及び果樹園の如き或具象物よりも成るものなり、と主張したるは誠に當然のこゝなり。されど其の結果は彼等をして、人類の或有様又は状態を表はしたる、富の舊來の意義を見失ふに至らしめ、而して富は人類の或物質的占有物なりと考へしむるに至れり。

五

經濟學者が富に關して最も普通になす所の叙述は、分量に關するものなり、即ち之が増加及び減少に關して論ずるを常とす。されど若し人類の富を以て、時間には何等の關係なくして單に或具象物より成るものを考へんか、其の増加及び減少に關して論議することは不可能なり。例へば、机・椅子又は麵包の増加と言ふが如き命題は、一見すれば會得し得べきが如く見ゆれども、是れ恰かも時間に關係せずして雨の滴數の増加を言ふと同じく、全く無意味なるものなり。普通は斯かる粗畧なる命題をば會得し難きものとも思はざるは事實なれど、そは言葉の前後の關係又は其の他によりて、此等の物に關する斯かる叙述は抽象的のものには非ずして時間と或一定の關係を有するものなることを推知し得るが故なり。即ち吾等は、時の或一點に於いて世界又は世界の或部分に在る机及び椅子に想到し、又例へば一週間或は一年といふが如き、時の或長さに於いて世

界又は其の或部分に在る麵包に想到せしめらるゝが爲なり。

然るに輓近に至るまでは、「富」の形式的定義の考究者等は此點を看過したる爲、其の結果多大の混雜を惹起したり。凡そ民衆は其の經濟の幼稚なるほど、時の経過と共に收得し得べきものよりは寧ろ時の或一點に於ける其の所有物に重きを置くものにして、又人は貧なるほど、目下有するものゝみを重んじ、過去に收得したるもの又は將來に於ける收得の期待に就いて考ふることを少きを常とす。「君は一年に幾干を得るか」又は「一週間に幾干取るか」といふが如き問は、原始人には勿論、今日最も「進歩したる」國に於いても最下級の人々及び階級の如何によらず凡て小兒に對しては、殆んど起らざる問にして、此等の者に起る問は只「君は幾干を得るか」と云ふにあり。されば、第十七世紀若しくは第十八世紀の人が富の増加又は減少に就いて言ひたる場合に、普通其の心中に浮べたる物

の集團は、年毎又は日毎に收入若しくは創造せらるゝ量額には非ずして、寧ろ時の或一點に於ける現存物の集團なりしこと敢て異むに足らず。之に反し文化進みたる社會に於いては、其後、定期的收得の觀念次第に勢力を有し來り、遂に現實の量額といふ觀念を壓倒するに至りしは、是亦驚くに足らざるなり。

而して寧ろ不思議なることは、此の如き思想の變化は、經濟學者が全く其變化に氣付かざる間に起りたることは是なり。思ふに此點に關しては、少くとも尤もらしき次の如き説明をなすことを得ん。即ちアダム・スミス氏が、先づ其の著を「國民の富の本質並びに原因の研究」に題し而して後、國民の富を入念に定義して、國民の「年々の生産物」(annual produce)又は「國民が年々消費する生活の必需品及び便宜品」なりと言ひたることは、大に此轉移を助成したるものなり。然れども氏は、氏の定義したるが

如き國民の富の觀念を、之を以て或一時點に於いて所有されつゝある物の數量なりとする觀念を、の間に於ける差異に就いては、特に注意する所なかりき。蓋、氏は當時、富を以て金銀の所有量なりとする淺薄なる觀念に反對し、之に抗論せんことを欲するに急なりし餘り、「一國民の富は時の或一點に於いて國民が所有せる土地・家畜・機械・並びに其他の物にはあらずして、寧ろ人民の勞働及び土地の年々の生産物なり」と言ふことを爲さずして、「富は金銀にはあらずして年々の生産物なり」とのみ主張したればなり。而して其後の學者は、久しき間氏に倣ふて同一の對語法(金銀と年産物との)を用ひ居たるが故に、氏と同じく、當時行はれつゝ、ありし變化の眞に重要な部分に就いては、自ら之を看過するの過に陥るに至りしなり。

斯かる説明の當否は兎もあれ、從來の經濟學者は、人々及び國民の富

を定義するに當り、「富」に關して分量的叙述をなす場合には、それは常に人々並びに國民の富を意味せざるべからず、それは果して或一時點に於いて其の所有に歸せる物の集團なるか、或は又時の或長さの間に生産され又は何等かの方法にて取得せらるゝ物の集團なるか、其の孰れなるかを明かに指示せざるの誤に陥りたることは、疑なき事實なり。然れども學者は實際説明をなすに當りては、多くはスミス氏に倣ふを常とし、隨つて富の「生産」及び「分配」を論ずるに當りては、氏と同様に、其の心中常に時の長さの考を忘るゝこと能はざりしなり。されば、富の生産に就いては一年間に於ける生産の多少に依りて其の大小を論じ、又富の分配に就いても、氏及び彼等の考へ居たるところは、畢竟年産物の分配に外ならざりき。斯くて未だ其の真相を指示せる定義は存在せざりしに拘らず、經濟學者が之に關して分量的叙述をなしたる場合に、普通彼等の論ぜんこ

欲したる「富」なるものは、即ち定期的に生産せられ若しくは入り來る所の富にてありしなり。是に到りて吾人は更に進みて、然らば斯かる富は果して如何なる物より成立するものぞ考へられたるか、を攻究するを得べし。

第十七世紀の末葉に於ける英國統計家は、此國の年産物を觀察するに、農民の眼を以てせり。即ち彼等は農地の粗生産物に着目し、之を以て人民全體の生活資料を成すものぞ認めたり。佛國に在りてもケチー氏 (Chey) の説を奉じたる所謂 *economistes* 即ち重農學派の人々は、等しく農業的立脚點を持し、更に、直接に土地の上に使用せられざる總ての労働には明かに之が生産性を否認することに依りて、一層如上の思想を進めたり。其後アダム・スミス氏出づるに及び、氏は單に直接に土地の上に使用せらるゝ労働のみならず、有形の物體に改善を施し隨つて氏の謂ゆる實行

と同時に消滅することなき他種の労働をも、亦總て「生産的」労働の中に包括することに依りて、富の觀念に對し正しき方向への一變化を加へたり。然れども氏は、生産的及び不生産的労働の問題をば資本の集積に關する研究と之を混同し、隨つて生産物(Produce)を生産するは如何なる労働なるかを研究する代りに、資本を生産するは如何なる労働なるかの研究に識らず、誘導せらるゝに至りたるが、若し氏にして斯かる誘惑に陥ることなかりせば、氏は恐らく此處に其の論歩を止むることなかりしならん。次いでセー氏(S. Sear)は、スミス氏の所論の弱點を看取し、生産的労働の觀念を擴張して「非物質的生産物」(non-material products)をも之に包括せしめんとしたり。其の後ジェー・エス・ミル氏(G. S. Mill)は、此の點に關して屢々陳腐の舊説を研磨せんを努めたれども、セー氏以來、謂ゆる年々の生産物なるものは「貨物」(Commodities)並びに「勤勞」(Services)より成るも

のミ一般に認めらるゝに至りたり。

年産物は、一層正確を期せんが爲、往々「純生産物」(net produce)と稱せらる。是れ例へば鐵の年産物として鐵鑛石・鉄鐵・及び鐵棒等を悉く合算するが如く、同一物を二重又は三重に計算するの誤を避くるの注意を要す。認められたるが故なり。されば、年々の生産物即ち一層正確に言はば年々の純生産物なるものは、現に消費者の手に達する貨物並びに勤勞に加ふるに、現存せる貨物の元本に増加されたる貨物を以てし、更に之より其現存せる元本より減却されたる貨物を控除したるもの、のみより成る。認めらるゝに至りたり。茲に消費者といふは最終消費者の意にして、即ち己れ自らの充欲の爲に之を消費し、それ以外の或結果を得んが爲に之を消費するに非ざる者の謂なり。例へば小麥の消費者は、其形式の如何を問はず之を食ふ人を謂ふものにして、製粉者乃至麵包屋等は

之に與らず。

然るに若し此問題を生産者の方面より觀んか、斯く純生産物を總生産物より實際に區別し得るが如き手段は全く之なきなり。或る少數の貨物、例へば麵包の如きものは、之を全く純生産物に屬するものも考ふるも重大なる不正確はなかるべし。雖も、多くの貨物は、直接の充欲の爲にも又其の後の生産の爲にも孰れにも用ひらるゝものにして、之が生産者の方面より觀る時は、何れの部分が果して其一方に用ひられ又何れが其他方に用ひらるゝかを區別すべき方法あることなし。例へば機械油に就いて觀んに、綿糸紡績工場にて用ひられたる分量は綿布なる他の貨物の生産の手段たるべく、之に反して、遊樂用の自動車を驅るに用ひられたる分量は純生産物に屬すべきなり。又瓦斯は、等しく同一の瓦斯工場より供給せらるゝも、其の或部分は商品製造の爲に使用されつゝある瓦斯發

動機の運轉に用ひられ、又其の或部分は食卓上の燈火用に供せらるゝが如し。又人の使用しつゝある現存物の元本が、或物の減減によりて減少するに同時に他物の添加によりて増加するが如きことは屢々起る場合なれども、斯かる場合に、其の總添加物を分ちて純添加物と然らざるものとの二つの部分に區別すべき方法なきものにて、之がため更に他の一大困難起るなり。例へば船舶の現在數が、小帆船三百隻の沈没又は破壊によりて減少せしむと同時に、他方に於いては大汽船五十隻の添加によりて増加したりせよ。斯かる場合に、船の數は二百五十隻だけ減少したりこのみ言ひては誤解を生ずべけれど、さればこゝで、帆船と汽船との運搬力の差異に關する計算をなし兩者を或共通の標準の下に比較せんとするも、それは種々なる假定及び憶測を包含するものにて、決して正確なる結果を得るものにあらず。

此等の困難は必ずしも常に明白に認められしに非ざるも、兎も角其の結果として、漸次、「生産物」又は「純生産物」なる語の代りに「所得」(Income)なる語を使用せしむるに至れり。マーシャル氏 (Marshall) が其の大著の舊版の冒頭に於いて、経済學の定義に關してなしたる提言の一は、人は如何にして「所得を得而して如何に之を使用するか」云ふにありき。茲に到りて、吾人は全く別異の方面より此問題を論ずることゝなるなり。即ち、從來の如く土地並びに労働より出發して二重計算を排除しつゝ、生産物を種々なる階梯を通じて追究する代りに、第一に先づ個人の貨幣所得の考察より得るころの純結果の評価に着眼する次第なり。

然れども貨幣所得なるものは、必ずしも常に、吾人が純生産物に屬すべき認むべきものを悉く包括するものにはあらず。例へば、農民は殆んき皆自己の生産物の一部を消費するものにして、又家婦の大多數は夫婦及

び其の家族等の物質的福利を増加すべき一種の家内的任務を行ふものなり。されば學者は、實際の貨幣所得に加ふるに、貨幣所得の中に算入されざる所の總ての経済的なる勤勞及び貨物の貨幣評價額を以てするに至れり。されど此案は二つの困難に遭遇するを免れず。即ち一は、何を以て経済的なるものとするや云ふことゝ關して起り、其二は、如何にして之を評價するや云ふことゝ關して起る。例へば子に對する母の勤勞は経済的のものなりや、而してそは乳母の勤勞と同じ貨幣價值にて評價せらるべきものなりや否や、の問題の如き即ち是なり。

今假に此等の困難にして避け得られたりませんか、畢竟吾人が貨幣所得と稱するものは、吾人に依りて享樂さるべき經濟性を有する貨物及び勤勞に加ふるに、有用物の元本に對して純増加を形成する所の貨物を以てしたるものを、代表すべき認めらるゝ所の一定の貨幣額に外ならざるを

経済的価値 + 勤勞 + 有用物の元本 + X =

見るべし。乍併、此の如く所得の分量を貨幣額にて表示したるだけにては、吾人は未だ満足すること能はず。蓋、單に此の如き標準に依りて社會の所得の増加を云爲する者あらんか、吾人は之に對して、「貨幣にて評價したる所得は或は増加したらん、されど其はたゞ金の價值下落に因るものに過ぎず。汝が所得を評價せる貨幣額の増加は、決して貨物及び勤勞が以前よりも増加し又は優良となりたるを意味するものに非ず」此の反駁を爲し得なければなり。是に於いてか吾人は、更に貨幣の購買力の研究を爲し、廻りて評價の依つて行はるゝ所以を考究せざるを得ざるに至るものにて、即ち單に所得を貨幣にて測定したるのみにては、吾人は未だ決して「眞實の」所得 (Real income) の考究を免れ得るものにあらず。要するに、所得は貨物及び勤勞より成るものにして又此等の貨物及び勤勞の分量と共に増減するものなる事は疑なしとするも、然らば其分

量は如何にして之を測定するを得べきか、云ふこゝが更に其次の問題と爲るなり。

貨物及び勤勞が種類を異にする場合には、目方・大きさ又は數によりて其の分量を明瞭に比較することの不能なるは明かなり。或は麵包一塊・牛肉一斤・ビール一合・及び鐵道切符一枚より成れる物の一集團は、之と同じ品質を有する麵包二塊・牛肉二斤・ビール二合・鐵道切符二枚より成れる物の一集團の半分に均しと言ふを得るならん。然れども麵包一塊・牛肉一斤・ビール一合・切符一枚より成れる集團と、麵包三塊・牛肉半斤・及び切符二枚より成れる集團との、此二集團の中に含まれたる分量の比較に關しては吾人は何等の叙述をもなすこと能はざるなり。一見すれば之を可能なる如く考ふることもあらんも、少しく反省せば、其場合に吾人の心裡になせる比較は分量の比較にはあらずして、實は價値の比較なりしことを覺

るべし。

若し分量を罷めて價值を比較するにせば、吾人は價值の本位の不變動に關して何等の疑問を起さざる限り、姑らく之に満足するを得べし。然るに價值の本位なるものは、同一の時及び所にありては、吾人の考へつゝある貨物及び勤勞の二個の集團に關して常に「同一物を意味」すべし。雖も、一日所を異にせんか、又時を異にせば尙更のこゝ、忽ち吾人は其價值の尺度は二つの所又は時に於いて果して同一物を意味するや否やの疑問を起すに至るべし。而して斯かる場合には吾人は必ず其の同一ならざるこゝを發見するを常とす。如何なる本位を採用したりとも、或る所又は時に於いては他の所又は時に比して、或る貨物又は勤勞は其本位の多くを値し又他のものは其の少くを値するこゝあるべく、又或る所又は時に於いては其本位の少くを値する貨物又は勤勞が、他の所又は時に

於いては、其本位の如何なる分量を提供しても全く之を獲得し能はざる場合すら屢々之あるべし。

要するに、結局吾人の求めつゝある所のものは、貨物並びに勤勞が人に及ぼす所の良好なる効果を測定すべき一定の尺度を得んことを在るこゝを知るに足る。即ち吾人の事實知らんことを欲する所のものは、一定金額の（又は一定の貨物及び勤勞より成れる）所得を有する個人又は團體は、他の所又は時に於いて一定金額の（又は一定の他の貨物及び勤勞より成れる）他の所得を有する個人又は團體に比し、同様に所謂「裕福」(well off)なりや否やこゝに存するを知るべし。

加之、輒近經濟學上の解析は、縦ひ其の分量が目方又は大さにて測定され得る場合も、尙、此等貨物の享樂が其の享樂者に及ぼす効果は、之を分量に比例するものも考ふる能はざるの事實に注意を惹くに至れり。

例へば一日毎に消費さるゝ麵包六塊は、一日一塊の場合よりも人をして六倍裕福ならしむるものには非ず。又随意に消費し得べき年六千磅の所得も、其人が年一千磅しか有せざる場合に比し六倍裕福ならしむることは無かるべし。尤も年六千磅を有すればして麵包一塊の代りに六塊を消費するに無かるべく、即ちその消費すべき貨物の種類に變化を加へて効用の低減を遅からしむることを得べし。雖も、而かも全く其の低減を防止するに不能なり。即ち人は其の所得の大なるに従つて、其貨幣の或單位をば、年千磅の所得しか有せざりし時に比すれば、一層些小なる充欲の爲に支出せざるを得ざるなり。

是に於いてか最近四十年間、一般經濟學者は、此等の貨物及び勤勞をば、其物自體を目的として考ふるよりも寧ろ或目的に對する手段として考へ、貨物並びに勤勞の占有・使用・及び消費の終極の效果に就いて益々

注意を加ふるに至れり。されば、從來は全然外界の物及び特定の行爲にのみ注意を傾けたるに反し、今や吾人は「効用」(utility)又は「充足」(satiation)に重きを置くに至りぬ。加之、第十八世紀の初期以降勃興し來れる文學及び政治學上の民主化的傾向は、吾人をして積極的効用又は充足の創造に含まるゝ苦痛及び困難をも考慮の中に入るゝを常とするに至らしめたり。さればアダム・スミス氏以前の經濟學者の大多數及び氏以後の或學者等は、「國民」の利害を觀るや、吾人の所謂「勞働階級」(working classes)なるものゝ利害を除外するを得べき或方法にて之を觀たるものなり。然るに生産の苦痛及び困難の大部分は、人民中此部分の者に落つるものなれば、勞働階級を國民中より除外したる彼等は、國民の爲の「富」の獲得に含まれたる苦痛及び困難に關する凡ての考察に對して、自ら風馬牛たるに至れり。されば此等の學者には、勞働階級が十時間働くべきか將た

十六時間働くべきかの問題は、單に孰れの時數が一層多額の貨物を生産するかによりて決せらるべき問題に過ぎざりしものにて、随つて一層多くの餘暇を得んが爲に積極的効用又は充欲を故らに犠牲に供するが如き考は、殆んそ彼等の想ひ浮ばざりし所なり。たごひ學者中此の如き主張を爲したる者ありとすも、其人自らも、此は非經濟的なる一層大なる善事を遂げんが爲に故らに經濟的犠牲を提議するものなりと考へたり。然れども近時の學者の大多數は、躊躇なく斯かる見解を排斥すべく、随つて彼等は一日十時間働きて積極的充欲の一定量を得つゝある人民を以て、一日十六時間働きて同一の充欲を得つゝある人民に比し、其の經濟的狀態は一層優良なりと認むるこゝ勿論なり。

斯くて經濟學の研究題目は、遂に不効用 (Inutility) 又は不充足 (Dissatisfaction) を差引きたる効用又は充足となるに至れり。されば、若し之が畧稱

として依然「富」なる語を採用せんか、即ち吾人の用ふる「富」なる語は、人類の或有様又は狀態を示したる之が舊意義に立歸りたるものと解すべきなり。

されど、其有様又は狀態は果して如何なるものなるかは、之を正確に説明するこゝ甚だ容易ならず。そは充足及び不充足より組成せらるゝものなれども、而かも此等の充足及び不充足は決して其の全部が盡く經濟的のものなりといふこゝを得ず。其の中には眞面目に且普通の用語に省みて何人も之を經濟的のものとし稱し得ざるもの甚だ多く、随つて如何に學問の分界の便利を重んずればとて何人も之を經濟學中に論ずるを敢てせざる性質のもの甚だ多きなり。

轉近に至るまで、經濟學者の大多數は、經濟的性質を有する充足と非經濟的性質の充足との區別を求められたる場合には、經濟的のものは實

買せらるゝことを得るものなりと明言し、又非經濟的のものは賣買せられ能はざるものなりと明言若しくは暗示するを常とせり。然れども此説明が、經濟學中實際に論ぜられつゝあるものゝ然らざるものゝを區別するの標準を與ふるものゝして認容せられ得るまでには、尙幾多の困難を排除せざるべからず。何故と云ふに、此説明は一方に於いては、總ての學者が現に之を經濟學中に包括しつゝあるもの、又は若し問題とならば必ず之を經濟學中に包括すべきものゝ爲すべき多くの事物をば、經濟學より除外するの結果となるなり。例へば數十萬の人々が毎週ハイドパーク(ロンドンの一大公園)の使用より享けつゝある充足は經濟的のものなること、何人も之を否認せんとする者なかるべしと雖も、而かもそれは交易され又は賣買され得べきものゝ言ふこと能はず。又假に火星には吾々と同様の人類が棲息し居り、且此等の火星人は吾々と同様に食物・衣服・及び住家

を以て其の欲望を充しつゝあることが發見せられたりませよ、然らば其後更に、彼等は私有財産制を設け居らず、交易も亦行ひ居らざることを發見せられたりとするも、何人も之が爲に火星人の經濟狀態を以て吾々の經濟狀態と全然比較し得べからざるものゝ爲すこと無かるべし。而かも此場合、火星に於ける衣食住は決して賣買されべきものゝ言ふことを得ず。されば、たゞひ同一物が地球上にては賣買され得るの事實ありとするも、之を以て火星に於いても亦等しく「賣買されべきもの」なりと認むるの理由と爲すに足らず。賣買され得るや否やを以て經濟的のものゝ然らざるものゝの區別を爲すの狭きに失するは此の如し。然るに又他方に於いては、賣買を標準とするときは、經濟學にて普通には論ぜざるもの乃至經濟學にて之を論ずるの便利ならざるものまでをも、經濟學の内に引入るゝことと成るなり。有史以來(又疑もなく有史以前にありて

も、經濟財として認められざる肉慾性の或充欲を供給することに多大の取引が行はれ、又宗教上若しくは道德上の罪惡たるべき事を犯すの免罪符が往々公然に販賣せられ、又殆んど何れの時代にもそが淺薄なる假裝の下に販賣せられたるの事實あり。されど、何人も斯かるものをば經濟財と認めたること無きなり。

經濟學の範圍をば賣買を標準として定めんとしたる學者等は、要するに、教育ある人々の日常の會話に於いて經濟的と稱へらるゝもの、全く同一の題目を論じたるもの、如し。されど此語は、斯かる會話にありては、必ずしも賣ること買ふこと又は賣買の可能といふこと、必然的關係を有するものには非ず。吾人は能く「經濟的問題」「經濟的利害」又は「經濟的觀察點」なといふ語を用ふ。又經濟的問題をば宗教的問題・文學的問題・歴史的問題・其他凡百の問題より分離して考ふることあり。或は、一

定の場合に於ける一定の人の經濟的利害が、其の政治的又は宗教的利害と相反せざるや否やを考究することあり。或は又、一定の非經濟的理由より大體排斥すべしと考へらるゝ、或事物をば、一定の經濟的觀察點より之を望ましきものと認むることもあり。

此等の言句及び其他同様の言句に於いて、經濟的なる語は、吾人が之に就いて殆んど何等の疑を起さざる或印象を吾人の心中に齎すものなれども、而かもかの「青」又は「赤」なる語の意義を説明するの困難なること同じ工合に又同じ理由に本き、之が意義を定義することは甚だ困難なり。突然「青」なる語に出會ふときは、天氣の樂觀者は蒼穹を想ひ出すべく、又或人は幼時弄びたる繪具箱中「青」を記されたる一區劃を想ひ出すべく、又自分が最初若しくは最後に着たる青色の上衣を想ひ出す者もあらん。之と同じ様に、「經濟的」なる語に出會ふときは、或人は先づ貨幣を想ひ出し他

の人は銀行帳簿の數字を、又他の人は田野に生ひ立てる作物及び牧場に草喰ふ家畜を想ひ出し、又或大都會にて日々の働きに急ぎ行く朝の群集を想ひ出す者もあらん。されど何れの定義に依るも、それは瞬間の思ひ着きなること又は思索の後に案出したるものなることを問はず、何人も無難にて種々の詰問を通過し得る者は無かるべし。然れども、若し各種の實例を引き來りて交々總ての定義に當て箴め見んか、如何なる事物が經濟的な事物の中に包括せられ又如何なる事物が之より除外せらるべきものなるかに就いては、種々の定義は全く相一致し少くとも殆んど相一致するに過ぎることを見ん。

例へば、「マホメッドは神の豫言者なりしや」の問題は經濟的問題にあらざることを、又豚肉を人類の食物とするを禁じたることは經濟的利害に關するものなることの如きは、彼等の皆一致する所なるべく、又「ベーコ

ン卿がシェークスピアを著はしたるか」は經濟的問題ならざることを、及びベーコン卿が之を著はしたることに一般に承認せらるゝことに依り暗號記法の信者の感すべき満足は經濟的満足にあらざること等には、總ての學者皆一致すべく、又若し著作権は永久のものなる場合に、シェークスピアミベーコンの子孫が其脚本の所有權を争ひたりせば、其爭議は經濟的方面を有するものなることにも皆一致すべきなり。

若し其證議が更に繼續せられて益々多くの實例が舉示せられんには、やがて彼等は、經濟的事物と非經濟的事物との間には何等「確固たる分界」あるに非ずして、恰かも青色のチクタイと綠色のチクタイとの間には種々なる中間色のものありて、孰れが青に屬し孰れが綠に屬するかの分界明かならざるに同様に、其一方は漸次に推移して終に他方となるものなりと唱ふるに至るべし。されば恰かも、空は（晴天の時）青色にし

て草は綠色なることには何人も一致すれども、他方には、或人々は之を青と稱し他の人々は之を緑と稱するチクタイもあると同じく、飢渴を充足するところは經濟的にして西藏の狂信者が一生暗黒中に幽居して感ずる満足は經濟的のものに非ざることの如きは何人も一致する所なれども、他方には、或人々は之を經濟的と稱し他の人々は之を非經濟的と稱する或事物も亦存するを免れざるなり。

普通の場合にありては、恰かも青色の物は之を青色と言ふを最良の叙述とすと同じく、經濟的事物は單に之を經濟的と言ふを以て最良の叙述とすべし。然れども、若し經濟的といふ語義の了解覺束なき人々の爲に第二の最良なる叙述を要すせば、余は之を「人類の幸福の主として物質的なる方面に關するもの」(Having to do with the more material side of human happiness) 又は簡單に「物質的福利に關するもの」(Having to do with material welfare) といふに歸着せしむるを得んことを信するなり。

上に用ひたるが如き正確なる辭句は、實は左程重要なものに非ず。蓋、吾人は、經濟的充足と非經濟的充足との間には何等正確なる分界線なき事、随つて又經濟學の領分は政治的領土又は土地財産の如くに柵又は垣等にて之を指示し能はざるものなるの事實に面し、而かも大膽に之に面し居らざる可からざるを以てなり。吾人は、一方の極端にありて疑なく經濟的なるものより、他の極端にありて疑なく非經濟的なるものに到るに當つては、其間何所にも何等越ゆべき溝もなく攀づべき垣もなく進み得るなり。即ち最も物質的なるものとして飢及び渴の充足より始まり、終には棄神の誓を拒みて餓死する殉教者の充足の如き最も非物質的なるものに到るまで、此兩極の間に其他の總ての充足をば畧ほ順次に排列するを得べし。尤も吾人は斯かる殉教者の福利を分析して、其の九割九分

は非物質的にして宗教的熱心に基き、残りの一分は物質的にして一週間前に食ひたる食物の營養力に基くものなり、なき言ふことを得ざるべく、又何人に關しても、其人の福利の五割は衣・食・住・繪畫・演奏會等より生じ、二割五分は妻の愛より、一割五分は教會への寄進より、一割は地方政黨の選舉委員會長たる地位の誇りより生ずるものなり、なきいふが如きことは到底言ひ得ざるべきなり。然れども、其人の幸福の比較的物質的なる方面、簡言すれば、物質的福利即ち富をば或は増加し或は減少するもの、何なるかを考察することは、全く正當にして且有用の事なるべく、而して又全體としての人類、個人としての人類、又は集團としての人類の物質的福利即ち富の原因を論ずる爲に、科學の中に經濟學と稱する特別の一分科を立つることは、全く便利なること、謂はざるを得ざるなり。

第二章 孤立人及び社會に取りての

富の根本的條件

經濟學の大部分は、社會に生活せる人類を論ずるものなり、然れども、先づ出來得るだけ簡單なる場合より始むるを最良とす。故に余は往々一知半斛の徒が之を以て「ロビンソン・クルーソー的經濟」なりと嘲笑せるにも拘らず、茲に姑らく孤立人の物質的福利即ち富の依りて定まるべき條件に就いて考究すべし。

吾人の所謂孤立人なるものは、多少抽象的のものたるを免れず。蓋し創世記に記されたるアダムの如きは、之が模型としては、超自然的勢力に包圍せらるゝこと餘り多きに過ぎたり。又吾人にして若し進化論の所説に據らんか、吾人は人類の原始を尋ぬることに依りて、恐らく一人の

孤立人又は一對の孤立人(アダム・ミイヴの如き)には溯らずして、寧ろ黒猩猩々の社會の如きものに溯るべきならん。更にロビンソン・クルーソーも亦、全く満足すべき模型にはあらず。何となれば、彼は難破を免れし諸道具及び其他の物を有し居たることは姑らく問はずも、少くも彼は已に社會的生存によりて獲たる幾分の知識を有して孤立の境遇に入りたるものなばなり。加之、其の孤棲せる間、彼は自己が偶然離去されたる社會的生活に復歸せんことを爲に努力したることも多く、随つて其の行動は全然孤立せる人の爲したらん所とは常に同一には非ざりしなり。されば、孤立人の物質的福利の依つて定まるべき眞の條件を有利に研究せんことを欲せば、吾人は先づ吾人のクルーソーを以て、常に地球上唯一の住人なりしものと假定し、如何にして其處へ來りしか又何時まで其生活を續くるか等の穿索は之を棄つるを最良とす。而して又吾人は、彼は或

方法によりて孤立人に取りては最も適良なる場所に置かれたるものと假定するを可とすべし。

扱て斯かる事情の下に在りては、孤立人の富は、先づ第一に其人の固有せる性質に依り、第二には彼が過去に於いて彼の力並びに彼の物質的環境に對して加へたる改良の程度に依り、第三には彼が現在所有しつゝある力並びに環境を如何に使用すべきかを判断するこの巧拙に依り、第四には富と其他の福利とを比較して如何に之を選択するかに依りて定まるべし。

(一) 孤立人の固有せる天賦の性質は、其者の物質的福利を左右すべき條件の一なることは、殆んき説明を要せず。其の生理的必要に比し其の身體及び精神にして強健ならば、斯かる必要は益々容易に且優良に之を充し得べきや明かなり。唯だ茲に起り得べき一の誤解は、實際上はさ

して重要なことには非ざれども、其生理的必要な量の量を考慮せざることに在り。即ち吾人は、強健なる者は衣食住に關して強烈なる要求を有するものなることをば深く考へずして、只、強健なる者は之を物質的福利の生産上一層勝れたる機械の如くに視るの傾あること^レ是なり。されどいかで、大なる人が其の大なる食事・大なる衣服・及び大なる寢床より充欲を得ること、小なる人が其の小なる食事・小なる衣服・及び小なる寢床より得る所に比して、一層多大なりと考ふることを得べきか。されば其の物質的福利に最も良好なる條件は、單に最大なる力といふことには在らずして、生理的要求に比較して最大なる力に在るなり。

(二) 或一定の時點より始めて、其後の期間に於ける一定の人の物質的福利を考察するときは、そは其人が過去に於いて爲したる所に左右せらるゝこと多きは言を俟たず。即ち

(一) 其の身心を衰弱せしむべき或悪習に耽り居らざる限り、彼は過去に於いて其の力を増進し居たること殆んご必然なり。種々なる手仕事を屢々繰返さば其の手及び身體の使用を益々熟達せしむべく、又觀察を行ふことなくして生活することは殆んご不能なること同時に觀察したるものを悉く忘却することも亦不能なれば、彼の智識は其の生活を持續するに従ふて多少の増進を爲さざることは殆んごあり得ざる所にして、而して此智識の増進は、彼の有すべき種々なる目的中兎に角其の多くを達し得べき力の増進を意味するものなり。然るに又孤立人は此の如き只附隨的なる進歩以上に、其の手先又は心の敏捷を進め又智識を増さんことを故らに企てたることもあるべし。例へば、その發達の或時期にありては、獲物なき折には的を射て距離の測量の爲にその心を訓練し又その智識に伴ふ手の訓練をもなしたるべく、或は又金屬及びその性質に關する智識

を増さん爲に、故らに種々の鑛石を以て實驗をなしたるこゝもあらん。斯くて彼は其の生存するこゝ長きに從ひ益々熟達し益々博識なるべきや明かなり。

(ロ) 吾人の假定せる孤立人は、斯かる自分自身の改良の外更に其の環境の改良をも行ひ、斯くて其の環境をして自己の目的に一層良く適合せしめたるこゝもあるべし。土地の外殻は、彼の目的より觀て一層善くも又は悪くも其の性質を變化せられたるべく、例へば、彼は土地の有用なる性質をば多く破壊するが如き方法にて耕作したるこゝもあるべく、又慎重に之を管理して將來の耕作に益々適良ならしめたるこゝもあらん。土地より石・鑛物・粘土等を探取する場合には、動植物の産物を繼續的に收穫する場合と異り、土地をして當初の如き良態を保たしめんこゝを望み難きは事實なり。然れどもそは幾分か土地を損惡せるにも拘らず、

結局は全體より觀て其者の環境を改良せるこゝ、爲るなり。例へば、彼が土地より取りたる石又は粘土を以て必要なる家屋の壁に造りたるが如き場合には、之に何等の人工を加へざる場合に比して、其の有用を減ずるものには非ずして却て之を増加すべし、單に斧頭を造るに必要な鑛石を有せんよりは、完成せる斧頭を有するの優れるは勿論なり。

されど此孤立人がその外界の環境に對して爲したらん改良の程度又は分量を測定するに就いては、別に簡單なる手段は無きなり。その行ひたる變化の効用は、其人の事情の變更の爲に、屢々増加又は減少し或は又破壊せらるゝこゝもあり。例へば或道具を造りたる場合に、其の智識の或變化は、之を造りたる當時に比して益々之を有用ならしめ、又智識の他の變化は、全く無用物として之を棄つるに至らしむるこゝもあるべし。野獸を捕ふるため大に辛苦して數個の陷穽を掘りたりこするも、若し其

の使用毎に入念の修復を要せんには、彼は著しき勞苦なく何回も装置し得べき簡單なる良を發明するに至らん。而して斯かる發明は陷穽の有物を全く破壊すべく、かくて彼が全く之を荒廢に委棄するに至るは至當にして且經濟的のこゝなり。良の發明前にありては、陷穽は有用物にして「改良 (Improvements)」たりしものなれども、其後にありては、只厄介なる地上の穴なるに過ぎず。斯かる智識及び事情の變化なき場合も、改良全體の額を合計して、例へば或一定期間内に三割増加したり云ふが如く、之に關する明確なる分量的叙述をなすこゝは不可能なり。蓋、異種の改良を合計し又其總額を或他の改良額と比較するの手段無ければなり。例へば、如何にして一列の林檎樹と一箇の鋤とを合計し、又如何にして其合計額をば一の溝と一の納屋戸との合計より成る他の改良額と之を比較し得べきか。全然同種の物に就いて考ふる場合にても、尙、其の數は

其物が實際に示せる其人の物質的環境の改良の額を測定する上に於いて何等正確なる指南たるものには非ず。例へば、唯一箇の鋤を有するに比すれば、之と全く同様なる二箇の鋤を有する方が、孤立人に取りて優るべきは勿論なり。然れども、彼は二箇を有するの利は一箇を有するの二倍の利に當ることは考へざるべく、而してそは勿論至當なるこゝなり。

(三) 孤立人が其の力及び環境を使用するに當りて行ふ判斷は、ただ重要なるこゝ明かなり。

人にして苟くも其の環境を使用せんせば、必ず一定の努力を要す。彼の力は如何に大にして其の環境は如何に優良なりとも、彼が或程度まで自ら努力するに非れば、彼の環境は決して彼を養ふこゝなし。而して努力そのものは、或は愉快なるものなりしか或は不愉快なるものなりしか云ふが如く一概に斷言し得べきものに非ず。即ち或種の努力は、其の

目的を達せんが爲に之を爲さざるを得ざる人々にまゝりては、殆んど常に不快なるものなれども、大多數の努力は、過度に之を行はざる限り愉快なるべきものにて、只或程度以上に行はるゝ場合にのみ不快なるに過ぎざるなり。吾人は他人より報酬を受くる努力を以て總て不快なるものを見るべきを常とすれども、こゝは吾人が一定の報酬を得んとする場合に、之を得んが爲に必要とせらるゝ努力は吾人に取りては一定の妨礙と爲るものにて、而して妨礙は常に不快にして吾人の常に出来得べくんば之を減減せんを欲するものなるが爲なり。されば、若し吾人にして何物をも稼ぐべき機會なき囚人たらんには、吾人は現在の仕事をば無爲無聊の氣晴らしとして却て之を歓迎するならん。されど又他方には、如何なる努力にても一度に餘り長き時間之を行はゞ不愉快なることは疑なし。非常に熱中せるフットボール又はゴルフ技の熱心家と雖も、日に十八時間づゝ

年に三百六十五日間之を所謂「遊ばん」とは欲せざるなり。餘り長く「遊ぶ」とは却て「勞働」となる。此は如何に變化多様な努力に就いて言ふも眞實にして、即ち何人も毎日幾分宛の絶對的安息を必要とするものなり。されば孤立人が其の努力を以て、常に出来得るだけ減縮すべきものと考ふるは誠に至當なり。之れを努力全體に就いて言へば、彼には努力すべきこと限りなくあり、されば各個の充欲を得るが爲には、彼は出来得るだけ努力を少くすることゝを要す。斯くて判断の第一の使用は、或一定の結果に對して努力を出来得る限り小ならしむることに在り。

然れども、問題は之にて盡せるにあらず。即ち人は特種の各充欲に關し又その充欲の全體に關して、努力と充欲との間に一定の平衡を求むるの要あるべし。詳言すれば、彼は努力そのもの又は之が附隨事に伴ふべき不快を斟酌したる後最大の充欲を生ずる様、其の活動と安息とを適宜

に按排するべきを要すべし。思ふに若し彼にして其度毎に之が按排に就いて考慮せざる可からずせば、そは彼にこりて非常の難事たらん。然れども實際にありては、在來の慣習が之を補助すべく、決して全然新たに之を始めて、動物性食物を得るには何時間を費し、各種の植物性食物を得るには何時間を費し、又衣服を作るには何時間を費すべきか等の問題をば、總て一時に決定するべきを要せざるなり。彼の爲すべきことは、唯、或種の生産に供したる時間及び労働を少しく減縮して之を或他の生産に轉用し、又は少許の労働を廢止して其時間を安息に供せば、自己に一層多くの充欲を與ふるや否や、を決定するに在るべし。勿論たゞ此れだけの問題にても相應に困難なる場合あらん。即ち、若し前の場合即ち二つの異種の生産の間に選擇をなすべき場合には、彼は單に其の得べき充欲の計量を要するのみならず、更に又異種の労働に含まれたる愉快又

は不快をも計量せざるべからず。又若し後の場合即ち普通の努力及び結果之よりも稍々多くの安息を伴へる稍々小なる努力及び結果との間に選擇をなすべき場合には、彼は更に三種の量を測定せざるべからず、即ち見合はさるべき充欲・輕減せらるべき労働及び得らるべき安息是なり。

事情此の如きが故に、孤立人の物質的福利は、其の努力の調節及び分配に關する其の判断の正確さに依りて左右せらるゝこと甚だ大なり。而して其の判断は、全く誤ることなきものにして假定せらるゝこと往々あれども、吾人は毫も斯かる假定をなすべき權利なく、又實際生活にありては、吾人は斯かる假定をなさんこと思ひも寄らざる所なり。さればこそ吾人は常に「或友人は過度に働きて却て小なる所得に甘んぜざるべからず」と言ひ、又「他の者は吾人の過大に認むる或特殊の充欲の爲に過多の資力を投じて其の精力の分配を誤れり」と言ふを常とするなり。

眼前の目的と比較的遠き目的との間に於ける努力の分配に關する決定を要せざる如き簡單なる場合にても、尙、判斷の正確を得ることは頗る困難なり。況んや斯かる決定をなすの必要あるときは更に多くの複雑を齎すものなり。即ち孤立人は、單に、如何に多く働くべきか又種々なる充欲の間に如何に其の勞力を分配すべきかの決定を要するのみに非ずして、更に、如何なる程度まで將來の爲に現在を犠牲に供し又は現在の爲に將來を犠牲に供すべきかをも決定せざる可からざるなり。

「將來 (the future)」に對して「現在 (the present)」を稱するは便利なり、然れども「現在」は、遠き將來に對して近き將來を意味するに外ならざることを忘るべからず。

普通の事情の下にありては、此點に關し彼の選擇に委せられたる場合は之を三種に大別するこゝを得、而して其の中二者は、彼の選擇により

て其の程度を伸縮し得るものなり。即ち彼は其の勞働と消費をば、將來に關する彼の地位が或期間（一週間・一年間・其他吾人の便する如何なる期間にても）の終りに於いて、該期間の初めに於けるに全く同様なる様に按排し、或は多少優良なる様に按排し、或は多少劣悪なる様に按排するこゝを得るなり。此等三方針の何れを探るも、其期間の事情如何に依つて何れも當を得たるものとなるべし。例へば病氣の場合の如く、若し其の期間が生命の維持だけでも困難を感じるが如き緊急已むを得ざる場合に屬するならば、彼は其の將來に關する地位を損惡せしむるも至當ならん、即ち暫らく知識の増進並びに物質的環境の改良を怠り、或は消費物の貯藏量を減じ、或は道具・家屋・其他の物を幾分無修理に放置するこゝあるも致方なし。之に反し、其の境遇甚だ良好にして活計に何等の困難なき場合なるに拘らず、其の力の増進又は物質的環境の改良により

て其の地位を改善せんが爲に、多少の時間及び勞力を犠牲にするが如きこと無くば、彼は即ち愚なりと謂はざる可からず。元來彼は、單に將來に於ける不測の變災に備ふるのみならず、平時にありても常に其の生活をして將來益々容易ならしめんことに努めざる可からざる筈なり。何こなれば、上述の如き境遇にありては、將來の利益は現在の犠牲よりも一層大なる可ければなり。蓋、目下順境に在る者にこりては、其の勞力の一部分をば現在の代りに將來の爲に供するも、現在に於いて失ふ所は甚だ多からざるべく、而して彼は一定の方法に依りて、其の勞力をば自己の永久の利益とする可きやう使用し得べき筈なり。例へば彼は、或動物の習性又は植物の所在の研究に十時間を用ひ得ば、其知識は將來に於いて日常の勞働を一週一時間宛餘分になすと同様の作用あるべきを知り、或は又、或道具の製作又は其他の物質的環境の改良に投する現在の十時間は、之

が修繕に要する勞力及び必要に應じ之を更改するが爲に要する勞力等をば總て計算に入る、も、なほ平均の勞働をば一週一時間宛餘分に爲すと同様の用をなすべきを知るべきあらん。即ち斯かる場合には、現在の十時間の勞働は、一年に五十二時間を費すと同様の結果を永久に齎すものなり。彼が目前の急に迫られ居りて、現在の必要を充す爲の各分時が非常に重要なる場合には、其の將來の状態の改善を企てずして専ら「其日暮し」を爲さんこと至當なれども、目下の境遇良好なるに拘らず、尙、一層大なる結果を得んと努むること無くば彼は即ち白痴なるべし。

然れども、斯く其時間の或部分を將來の爲に供するを可とする場合も、之に供すべきは唯限られたる時間のみなるべきや勿論なり。思ふに之が制限には二つの理由あり。第一は、將來の爲に勞力を供すること多きに從うて、將來に於ける利益は(勞力の量に比して)益々減少するに至

るこゝ是にて、第二は、將來の爲に勞力を供するこゝ多きに從うて、現在に於ける損失は（勞力の量に比して）益々増大するに至るこゝ是なり。例へば、彼は將來の爲に現在十時間の勞働を爲すこゝに依りて一週一時間即ち年五十二時間の結果を齎すべき或方法を知るこゝあらん、されど彼が更に第二の方法を考へ出さんとするこゝきは、或は僅かに一週半時間以上即ち年二十六時間以上の結果を生すべき方法をすら發見し能はざるこゝあるべく、更に又第三の方法は年僅かに五時間を費すに過ぎざる等以下次第に之に准するこゝあるべし。又他方に於いては、彼はその眼前の必要より十時間の勞働を取り去るも、何等甚だしき不自由を生ずるこゝなきに拘らず、更に第二の十時間を取り去らば、前よりも甚だ重大事となり、更に第三の十時間を減ぜば、生活の或絶對的必要物の損失を起すこゝある可きを忘るべがらす。されば、將來の爲に時間を供するこゝは之

を或點に止めざる可からざるや明かなり、而して之を那邊に止むべきかの決定は緻密なる判断の行使を必要とす。彼はあらゆる將來を正確に豫見するの明ありとするも、尙、誤斷をなすの虞あり。况んや實際にありては、其の將來の豫見は必ずしも常に正確なる能はず、随つて吾人は此問題に關する彼の決定を以て、誤謬無きに近きものなるこゝを期待すべからず。

茲に注意すべきは、吾人は孤立人の物質的福利全體をば、獨斷的に選びたる或時點より始まるものとして考察し、其他には何等の制限を設けざりしこゝ是なり。即ち吾人は其後の總ての時に亘りて孤立人の物質的福利を最大ならしむるこゝを以て問題なりと假定したり。されど、若し或一定期間に於ける彼の福利をば其後の或期間に於ける福利と比較せんと欲する場合にても例へば一八九〇年に於ける福利と一九一〇年に於け

る福利云ふが如く、吾人は其一定期間に於ける其の物質的福利を左右する條件の一として、彼が眼前の結果の代りに將來の結果の爲に働くを可き認むる範圍如何といふことをば、矢張り考慮の中に入る、を要すべし。要するに其の目下の状態に就いて言はゞ、總て他の條件に變化なからば、彼が其の時間及び勞力をば現在の充欲の爲に供するここの多きか少きかに依り、又將來に關する其の地位の改善の爲に供するここの少きか多きかに依つて、目下の生活は或は裕福となり或は貧乏となるべきは明かなり。

(四) 以上吾人は、孤立人は其の物質的福利をば出來得べきだけ大ならしめんことを希ふものと假定したれども、これは必ずしも常に然るに非ず。即ち彼は、一層高尚なるものと認むる或充欲を得んが爲に、故らに物質的福利の或部分を犠牲に供するここのあるべし。ジー・エス・ミル氏は當初の頃、

又バジォット氏 (Hagelot) は其の後三四十年の頃、孰れも、經濟學は富の追求の外何等行動の希望を有せざる想像上の人即ち所謂「經濟人」(Economic Man)なるものを假定せざる可からずと考へたり。されど斯かる覺束なき假定は、恐らく極めて初步の説明の簡易の爲の外は毫も其の要なし。吾人の假定せる孤立人の如きは、時として故らに其の物質的福利を増進せざる行爲に出でんとするここのあるべきは、容易に想像し得べき所なり。例へば、彼は吾身を鞭撻することに依り又は神壇に最善の動物を燒くことに依りて、或偶像若くは神に贖罪し、以て死後の冥福を祈らんことを欲するともあるべきなり。而して他の條件に變りなからば、彼が此種の行爲を擇ぶここの多ければ多きほど、其の物質的福利即ち富は益々少かるべきなり。

以上は孤立人に關する説明なるが、次に、社會の——即ち互に相接觸し

て生活せる數多の人々の——物質的福利即ち富を支配する條件に就いて考ふるに、これ亦大部分は、孤立人の富を支配すべき條件と同一にして、たゞ人々の聯合といふ事により、又多數といふ單純なる事實によりて、幾分の複雑を來すのみなり。

(一) 孤立人の固有の天性が彼に取りて重要なものと様々に、社會を成せる民族の固有の天性も亦社會に取りて甚だ重要なものなり。譬へば、若し世界の人類が隻腕又は無眼の人種より成りたらんには、之に因る彼等の不便が吾等の有せざる或他の便益にて償はれざる以上、彼等の物質的福利は到底吾等の其れの如く大なるを得ざるべし。又孤立人の場合に述べたる如く、富の爲の最良の條件は、單に最大の力には在らずして、生理的要求に比して最大なる力に在ることには、社會人に取りても亦同様なり。若し人類がスウィフトの小説のガリヴァアの旅行譚中にある倭人族の如

くに小ならんには、一見すれば、人類は決して現在の如く裕福なるを得ずと思はるべし。然れども、若し人類が同小説中の巨人族の如く巨大ならんには、果して現在よりも一層裕福なるを得たるべきや否やを顧みれば、問題は吾人の想像せる如く爾か簡單なるものに非ざるを覺るに足らぬ。巨人の大力を有しなば恐らく巨人の大食欲をも有すべく、随つて大なる影響を生じ得べき人口の減少なき以上は、吾人は毫も以前よりも裕福なるを得ざるべし。

(二) 或一定の時點より始めて、其後の期間に於ける社會の富を考察する場合には、其期間の富は、過去の人々に依りて爲された所の如何に依ること大なるや明かなり。

(イ) 現存せる人類の有しつゝある力は、開闢以來固より著大なる變化を受けたるものなるが、それは常に「發育」にのみ本くに非ず、又種々な

る技術の習得並びに思慮ある教育、即ち固有の力の開發に俟ちしもの多し。而して此點に關しては、固より時代に依りて社會の狀態に甚だしき優劣の差異あり。思ふに羅馬帝國建設以前に於ける歐洲の住民は、當時彼等に必要なりし仕事に關し、今日吾々が其等の仕事に對するよりも、遙かに良く教育訓練され居たるや疑なし。而して只此一例に徴するも、總ての時代及び總ての場所に適合すべき教育の絶對的標準を設くるの難事なるを知るべし。然れども、或一定の狀態の下に在りては、教育訓練の如何に依りて人類が此等の狀態に比較的に適良又は不適良ならしめらるゝこと之の可能なること、及び斯かる相違が彼等の物質的福利に影響すべきものなることは、何人も疑ふ所に非ず。

教育又は訓練に因る熟練の差異よりも一層重要なるものは、人々の有する知識の量の差異にあり。文明世界に於ける物質的状態の進歩の重要

なる原因を探求するときは、必ずや吾人は其の主たるものとして知識の増加を挙げざるを得ず。吾人が遠き祖先に比して、自然の力を甚だ多く利用し得る所以は、これ吾人が祖先よりも生來伶俐なるがため又は一層善く教育せられたるが爲には非ずして、各代の者が毎に新たなる知識を得而して初めは口語により後には手書又は印刷せる符號によりて之を其の子孫に傳へ、随つて知識の蓄積量が絶えず増加したるが故なり。

(ロ) 既に述べたる如く、何れの時にありても、孤立人の物質的状態は、其の環境の改良の爲に其以前の期間に於いて行はれたる所の如何に依りて、左右さるゝこと大なるものなるが、社會の物質的状態も亦之と等しく、人々が過去に於いて行ひたる地球面の配置の變化に依りて左右さるゝと大なるものにして、知識の増進に次いで、物質的環境の改良(人類の觀點より觀たる)が、其の物質的福利の進歩の最大且最著なる原因た

り。思ふに、地球の表面は種々の方法に依りて人類の目的に適する様に改造せられたり。例へばかのスエズ運河の如きは、事實上諸大陸の地理的地位を變改したるものと謂ふべく、パナマ運河の如きも亦同様ならん。されど此等は、かの廣大なる網の如く已に地球上の文明地方を蔽ふて今や方に未開の部分をも貫通せんせざる。道路及び鐵道に比すれば、只些小事に過ぎずと謂ふべく、更に又此等の道路及び鐵道は、かの數百萬哩の土地—事實上、地球上の地面の過半部分—が農業上の目的の爲に改造せられたるの事實に比すれば、同じく亦一些事に過ぎずと謂ふべし。此等の改良に加ふるに更に、人々が住居し、仕事を爲し、又風雨に耐へざる物を貯ふる爲の、家屋及び其の他の建物の巨大なる數量に上るあり。其の他家具・あらゆる諸道具・及び機械（車輛船舶をも含む）も亦、もとは土地より採取せられて今は人類の目的に適する様に造られたる金屬・木材・

及び其他の材料の一大集合たり。最後に又、同じく土地より獲られたるもの、中には、不測の變に備へ又は種々の季節を通じて供給を平均せしむるに必要な元本を以て存在しつゝ、ある材料及び食物の額もあり。而して各代の人々は常に其の先代の遺したるもの、相續者にして、其遺産は相續毎に單に絶對的に増大するのみならず、相續者の數に比例して相對的にも益々増大するに似たり。勿論、遺産の大きさをば或數字上の本位によりて之を測定し得んことは望む可からざることにして、此は孤立人に關して不能なることと同じく社會に關しても亦不能なり。知識の變化の効用をば數量的に言ひ表はすことは不能なるが、物質的環境の變化の効用に關しても亦同様なり。蒸氣を人類の用に供し得べき方法の知識を有するとは甚だ有用にして、又蒸氣機關及び之が運轉に必要な物即ち工場・船舶・鐵道等を有するとも大に有用なり。されど、吾人の用ふる知識の効用

に關して數的敘述をなすの不能なるに等しく、吾人が其知識を應用して使用しつゝある有用物の額に就いて數的敘述をなすことも亦不能なるを忘るべからず。若し此等の物は如何程有用なるかの觀念を得んことを欲せば、假に此等の物が今夜中に全部消滅したりせば明日に於ける吾人の状態は果して如何ならんかを想像すべし。食事せんことをするにナイフもフォークもなく、食物を載すべき卓子もなく、卓子を容るべき室もなく、食房にも店にも穀倉にも何等の食料なく、僅少なる野生の豚・兎・鳥類の外は一匹の羊・一匹の牛もなく、道路も鐵道もなく、食ふべき野菜もなく、密林深澤の外何物も無からんには、吾生果して如何ならんかを考ふべし。勿論、物質的環境の改良は、永久に存続すべきものにして行はれ且其の當時は永久的改良を考へられたるものにて、終にはたゞ一時的のみ有用なりしに過ぎざることを多けれども、併し少くとも現時にありては、

其改良は差引残存するもの、方が常に甚だ多大なるが如し。而して斯く残存するものは、損耗と共に新式の代用物と取換へらるゝ所の非永久的有用物の永久的増加と併せて、物質的環境に關する各代の人々の地位をば、前代の其れよりも益々良好ならしむるものなり。

(三) 社會の富は、孤立人の富と同じく、其の力及び環境を使用するに當りて行ふ判斷の如何に依りて、左右せらるゝことを大なるは言を俟たず。

社會の場合にありても、孤立人の場合と同じく、此等の力及び環境を使用するには、努力即ち普通謂ゆる勞働なるもの、必要あり。又一定の努力即ち勞働は或場合に於いては他の場合に比して概して善なり又は惡なりなき斷言し能はざるものなる事も、孤立人の場合と異らず。乍併、たゞひ勞働を以て本質上惡むべきものとは認めずするも、社會も亦孤

立人ニ等しく、或目的の成就に必要な労働をば成るべく減縮せんニ希ふは至當の事なり、蓋、労働を要する仕事は常に限りなく存在し、而かも或程度を越ゆる労働は疑もなく害悪なるが爲なり。随つて社會は孤立人ニ同じく、其の物質的福利即ち富を出來得る限り大ならしめんが爲には、其の各目的を達するに最も容易なる方法を採用するを要し、而して其の全労働を調節するには、常に労働ニ其の結果ニを比較して（若し労働の不快あらば之を其の結果の快より差引きて）正に最大の満足を得べき點を標準ニして、其點までの労働を費すこと、す可きなり。同時に又社會は、同じく労働ニ其の結果ニを比較し最良の結果を生すべき方法にて、其の全體の労働をばあらゆる目的の間に分配せざるべからず。

此は孤立人に取りて甚だ困難なることなるが、社會に取りては更に幾十倍も困難なることなり。孤立人は總ての種々なる方面の便益を比較考

量するに唯一個の頭腦を有すれども、社會は何等共同の頭腦を有することなく、たゞ幾百千萬の別箇の頭腦を有するに過ぎず。故に或措置より生ずる愉快及び苦痛の全部をば幾分正確に計算せんニせば、如何なる完全なる組織を有する委員若しくは如何なる人物の有し得べき知識よりも、遙かに以上の知識を要すべし。されど實際にありては、社會は、孤立人ニ同じく、初めより出發して、幾何の時間又は努力をば或は食物の生産に供し或は衣服の生産に供すべきかを、始めて決定することゝを要せず。或分配法は兎も角已に行はれ來れるが故に、唯新たに決定を要するは、此分配法は或方向に少しく之を變更するの要ありや否やといふことに過ぎず。然れども此れ亦一大難問にして、之が決定に際しては誤謬に陥るの危険甚だ多きものなり。

更に又直接の目的ニ永遠の目的との間に於ける努力の分配に關して、

孤立人の有する困難も同様の困難は、社會の場合にも亦存せり。唯その差異は、其困難が前者に比して著しく大なることに在り。吾人の假定せる如き無限に長き壽命を有する孤立人が、將來一層多くの享樂を得んが爲に現在の享樂を節約する事の望ましさを測ることは、夫の自己の後繼者の享樂を増さんが爲に自己の享樂節約の望ましさを測るを要する所の生命短き人々より成れる社會に比すれば、遙かに正確なることを得べきなり。例へば、單一人が自己の今年節約する一割を自己が將來に亘りて年々多く得べき一分を比較し、其の就れが利なるかを考量するところは非常に困難なるには相違なれども、併し之をば社會の場合、即ち多數の人々が彼等自身が今年節約する一割を彼等の中の生殘者並びに彼等の中の死亡する者の後繼者が將來毎年多く得べき一分を比較する場合に較ぶれば、單一人の場合は比較的容易且正確に之を爲し得べきなり。多

人數は、或一個人が自己の將來の願望の強度を測り得るに同じ正確さを以て將來に於ける多數人の願望の強度を測ることを得ざるのみならず、彼等は其人數に如何なる變動の起るべきかをも知らざるなり。將來に於ける人數の大なるに従うて、他の事情にして變化なくんば、現在に於ける貯蓄の望ましさは益々大なるべし。加ふるに、其人數そのものが又貯蓄の額に依りて影響を受くるものにして、例へば、貯蓄せらるゝこと多きに從うて將來の人口は益々大なる可きものなるが、此事實は更に這個の困難を増大すべきなり。

茲に注意すべきは、吾人は、孤立人の場合と同じく、或時點以後に於ける直接の將來及び其れ以後の將來を一體に看做して、社會の富を考察しつゝあるものなることは是なり。されど又吾人は、例へば一年といふが如き時の或一定の期間を採りて、斯かる期間に於ける社會の富の依つて

定まる所以を考察するを得べきは勿論なり。斯かる場合には、將來の享樂の爲にする現在の享樂の節約は、假ひ之がため、將來の享樂は結局に於いて、今日犠牲をさるゝ所の享樂に比し如何に多く超過するに至るべきものと認するも、皆これ富（勿論、其期間に向つての富）を減少するものと認めざるを得ざるなり。

(四) 孤立人の場合と同じく、社會が社會自身又は少くとも之が主宰者たる一部の者の擇ぶ或他の目的を達せんが爲に、故らに一定額の富を犠牲とするところは、あり得べき事にて、實際上亦屢々之あり。

以上述べたる所は、富の差異を生ずべき諸原因中、孤立人及び社會に共通なるものを挙げたるものなるが、此外獨り社會のみに影響するものと認して、更に次の三原因を附加せざる可からず。

(五) 孤立人の健康及び社會を組織せる各個人の健康は、孰れも其の固

有せる個人的天性及び之を改善又は損悪せる過去の所爲の結果なりと認むることを得べしと雖も、而かも社會の場合にありては、健康が勞働生活の長さに影響する點よりして、之に關する特別の分類を必要とすべきなり。生存年齢の總計中、幼齡及び老齡の割合が比較的に小ならば、其人民は他に比し一層強健にして、財を生産する力一層大なるべきや明かなり。人民中半數は五十歳にて死し他の半數は九十歳にて死するよりは、全體が七十歳にて死する方優り、又六人中五人は十五歳にて死し其他は六十五歳にて死するよりは、寧ろ前の如く其の半數は五十歳にて死し他の半數は九十歳にて死する方優れり。

加之、一定の時に於ける人口中勞働年齢に在る者の割合は、單に、死亡率の差異より生ずる所の勞働年齢者と其他の年齢者ととの割合に依りてのみ影響せらるゝものに非ずして、更に人口の増減に依りて影響を受く

るものなり。「自然に」—即ち死亡に對する出産の超過に因りて—増加しつゝある人口に在りては、他の事情に變りなくば、必ずや幼者の割合比較的に大ならざるを得ず。されど、若し此増加が長き期間に亘りて絶えず繼續しつゝある場合には、此原因よりの弱點は、老衰者の割合の小なるに依りて幾分か相殺さるべし。同様に又、減少しつゝある人口に在りては、老者の割合大なるべく、而して若し其減少が繼續的な場合には、此原因よりの弱點は、幼者の割合の小なるによりて相殺され得べきなり。要するに、社會の富は、或點に於いて人口の年齢の配合如何に依りて左右さるゝものと言はざる可からず。

(六) 社會の富は又、協働即ち合力及び分業より生すべき利益を利用するこゝの如何に依りて左右せらる。

(七) 最後に、社會の富は、人口が最も適良なる大きさに接近せる程度

の如何に依りて左右せらるゝものなり。

右最後の二項は、次の二章に於いて論ずべし。

第三章 協働、即ち合力及び分業

Co-operation 七二

相互に交通し得べき事情の下に生活せる數多の人々は、其の欲する場合には共同して働くこと即ち協働することを得べし。協働は、巧に之を行はゞ、其の希ふ結果を生ぜしむべき總體の力を、甚だしく増大するものなり。

數多の人々が全く同一種の仕事を爲すに當りて其の力を結合する場合に行はるゝ協働、即ち時として「單純協働」(Simple Co-operation)と稱せらるゝものゝ利益は、殆ん茲に説明の要なし。互に近所に住める二人の孤立人は、例へば重き物を揚ぐが如く、一人の力には及ばざれ共二人には可能なる仕事、又は天氣良き間に收穫せんことをするが如く、一人にて爲し得ざるには非ざるも迅速に之を仕遂ぐることを能はざる仕事を爲すに當り

て、互に相扶けんが爲に屢々其の孤立を棄つる事あるべきは見易き道理なり。されば、學問上の議論及び興味は専ら一層複雑なる形式の協働に存するものにして、即ち往々「複雑協働」(Complex Co-operation)と稱せられざるも普通には「分業」(Division of Labour)と呼ばるゝもの是なり。此は或目的の達成の爲に意識的又は無意識的に其の力を結合せる所の數人又は數十、數百の個人の間、種類を異にせる仕事又は勞働が配當(即ち其間に「分割」(division)せらるゝ場合なり。

分業は種々なる利益を有す。即ち、

① 其第一は、人をして地球の表面の異なる部分が有するところの種々なる性質をば最も良く使用することを得しむるに在り。各人若し全然單獨にて働かんには、甚だ狭小なる或地域よりあらゆる物を獲得せざるを得ざる可し。假令彼は流浪彷徨の生活をなし、且其間他人と衝突して

殺さるゝが如き禍は之を避け得たりとするも、其の及ぶ地域は甚だ廣大なるを得ざる可く、若し又彼にして毎夜又は數日毎に歸り來る可き住居を有せりせば、其の達し得可き地域は甚だ狭くして、吾人が「生活の必要物」を認むる夥多の資料中より只僅少の物のみを獲得し得るに過ぎざるべし。幸にして地球上最良の地位を認めらるゝ場所に生活し、單純なる生活必要物は皆之を得て、更に若干の奢侈物さへ得つゝある者も雖も、尙今日吾人が地中より採掘せる礦物及び其他の物の如きは到底十分に獲得するを得ざるべし。かくて取得し得べき材料餘りに少くして斯かる社會狀態(若しくは非社會的状態)に適すると最も少き場所は、人類の棲息全く不能ならん。然るに分業行はるゝときは、かのトランスヴァールのランド地方がたゞ金の生産に適し、英國海峡のジェルセイ島が早熟の馬鈴薯の生産に適せるが如く、唯一種又は若干種の貨物若しくは勤勞の生産

に適するに過ぎざる場所も、尙之を十分に使用することを得しむるものなり。

斯かる分業の利益の重要なるは明白なることにして、そは世界の歴史上顯著なる事實の説明する所なり。即ち、小地域の生産物のみに限られたる人民は、吾人の所謂「原始的」又は「野蠻」の狀態に留まるを常とせり。蓋、彼等は假令發明に必要なる能力を有したりとするも、材料の種類の少きに制限せられて、殆んど機械的改良を行ふの機會を有せざりしなり。文明の進歩は交通随つて又協働の最も容易なりし所より始まりたるものにして、吾人が歴史に溯り得る限り、現今の文明諸民族は、皆遠隔地方よりの生産物に就いて豊富なる供給を有し居たるものなり。只少數の場所のみ發見せられたる銀及び金が、常に文明の全區域に亘りて流布せられたるが如きは即ち其の一例なり。

吾人は茲に、單に、或地域より或生産物を得るとの不可能といふ點のみを考ふ可きに非ず。其他に尙考ふ可き困難多く、縦ひ無限の困難即ち文字通りの不可能には達せざるも、其れ迄に至る間に種々なる程度の困難あるなり。吾人が珈琲をブラジル國より、茶をセイロン島より、バナ、をテネリッフ島又はヂャマイカ島より得るは、此等の物を英國にて栽培するに絶對に不可能なるが故には非ずして、たゞ土壤及び氣候がさほ適せざる英國にて之を栽培するに、比較的困難多きが故なり。土壤及び氣候は所によりて大に異なるものにして、之が爲、獨り或場所に限りに行はれ得可き産業のみならず、又場所に依りて比較的利不利の差ある多くの産業も亦、之を或場所に集中するときは、之に依りて人類の欲望は全體より觀て明かに最も善く充さる可き場合あり。試みに、茲に種々なる土壤及び形狀を有せる一個の農場ありと假定し、暫らく之に就いて

考察せんか、以上の理由は或は一層容易に之を了解するを得ん。斯かる場合にありては、耕作者は先づ此等の種々なる土壤及び形狀を考察し、萬事を酌量したる上にて全體上最良と信ずる方法に依り、其土地をば種々なる作物に配分す可し。各エーカー毎に總ての作物を少しづつ栽培し、又は住所への運搬の便の外は毫も顧る所なく、強いて之を小麦畑・牧場・薯畑等に分割せんとするが如きは、狂者の所爲たるや明かなり。全體より觀たる人類も亦殆んぎ之と同一の地位にあるものなり。即ち大多數の各産業は、たゞ運搬の勞力を増加するに、或程度までは之を或地域に集中するを利す可し。唯、吾人の考察をば單一農場の場合より擴張して、之を世界の場合に適用せんとするに當りて起るべき主なる困難は、單一農場を論ずるに當りては、吾人は住所の位地随つて又産物の行先は、歴史的事情に依りて既に決定せられて動かざるものと認むるを常とすれ

ごも、世界全體を考察する場合には、人類の所在は固定せるものに非ざるの事實を、酌量せざる可からざる事より生ず。已に其の所在にして固定し居らざる以上、各種生産物に對する消費者の位地も亦一定せるものご解するを得ず。斯くて或地域に於ける或種産業の集中の問題は、人口分布の問題ご相纏綿して難解なる密接の關係を有するものなり。此難問を最も抽象的形式にて攻究せんがため、假に吾人を以て神の如きものご想像し、吾人の眼前には無人の地球横はり、而して人類全體は吾人の手中に在りて、吾人の欲するまゝに地球面に植民せられ且吾人の命する所を遵奉するものなりご假定すべし。斯かる場合には、人民及び産業を如何に排置せば最良なるか。此は確かに至難の問題なれごも、而かも吾人は全知全能を以て正確に之を解決し得るものごせば、其解決法は、必ずや或地域に於ける産業並びに人口の著しき集中を意味するものたる可きや明かな

り。されご、或貨物の生産全體をば或一個の地方に集中するを可ごするが如き事は恐らく之無かるべし、何ごなれば、或一地方の優良なる性質が、苟くも人類の住むべきあらゆる場所へ其生産物を運搬するを要するとの不利益を償ふて、尙餘りあるが如き事は殆んご之無かるべければなり。例へば、運搬を離れて只木綿を生産するごのみより觀れば、北米の南キヤロリナ州及び印度のボンベ州は、英國のランカシャー州の如くに之に適したる土地には非ざれごも、而かも運搬の便より、此等の地方にも亦幾分の木綿製造業を設くるを可ごするごあるべきなり。されば、産業の集中ご云ふ事は、通常は只著しき程度にて行はるゝのみにして、決して無制限に行はるゝものには非ず。

産業の地方的集中より生ずる利益を摘要的に説明するが爲に用ひられつゝある、簡略なる辭句を採用するに當りては、大に注意せざる可から

ざる事あり。例へば産業の地方的集中は「何事をも其の目的上最も適當なる場所にて行はるゝ」ことを得せしむる言ふが如きは、甚だ不十分なり。何となれば、一の場所が二種又は二種以上の産業に最適の場所なること屢々之あり、而かも斯かる場合に於いて、其場所に一種以上の産業を容るべき餘地なきときは、他の産業は最良ならざる第二流・第三流・又は第四・第五・第六流の場所に置かれざるを得ざればなり。産業の排置は、以上の諸點を總て考慮に入れ、又消費者の享くる快適が産業より離れて考へらる可きものなる時は之をも考量に入れ、斯くて其全體より見て最も適當なりとせらるゝ方法に従ふて爲されざる可らず。消費者の快適に關する如上の但書が必要なるは、劣悪なる氣候に住むの不快等が看過せられんことを防がんが爲なり。一定の産業集中は、單に其の生産物に關してのみ考ふれば非常に良好なるものなりとするも、若し之が爲に世界人類

の一大部分が南極の大陸に在むことを強いらるゝが如きことゝならば、それは甚だ劣悪なる集中と謂はざるべからず。要するに、余が本節の冒頭に述べたる如く、協働は地球の表面の異なる部分が有する種々なる性質を最も良く使用することを得しむるものなり、と言ふときは吾人は先づ過なきを得べきなり。

勿論、實際にありては、此の如き産業分布の問題は決して一時に全體として起るものには非ず。過去に於ける世界の發達の結果として、地球上には既に人民及び産業の一定の分布が行はれ居るが故に、假令若し吾人が全然新規に之を始めたらんには全く之と異なる排置を以て最良とすべきを信ずる場合と雖も、尙之に急激なる甚だしき變化を加へ又は加へんことを企つることは不可なるや明かなり。吾人は實際は寧ろ前述せる農夫と同一の地位に在るものなり、即ち其農夫にせりては、已に或地點に其

の住居は設備せられ居り、又其の所有せる農地は已に幾多の田畑に分割せられ居り、随つて其田畑は各々過去の勞働に依りて附與せられたる或性質を有し居るものなれば、之を自然の状態に委したる場合に比すれば、或目的には一層適良となり又或他の目的には一層不適良となり居るものなり。されば、斯かる耕作者に取りては、住居には何れが最良の位地なるか、又若し「總てを新規に始むる」を得ば全地面を異種の耕作に如何に配當せば最良なるべきか、等の諸問題を考究するの要はなく、唯、住居を取毀ちて他所に移さば有利なりや、又例へば牧地を開拓し、草地を耕地に變じ、或は新たに地面を改分せんため或垣壁を撤する等、之に依りて田畑の全部又は幾部の既得の性質を變化せば有利なりや否や、さ云ふが如き一層容易なる問題の考究を要するのみなり。或一定時に於ける世界全體に就いて觀る場合も亦同様にして、人民は已に或割合にて其の上に植民

せられ既設の住居及び勞働所を有し、而して土地の大部分は、已に人類の過去の勞働に依りて種々なる用途に適合せられ居るを見るべし。又地球上の人口は種々の人種より成るものにして、其の大部分は或大陸及び或國々に集中し、又此等の諸人種は甚だしく相異なる力を有し甚だしく相異なる發達階段にあるものなるを見ん。されば、此等の人民・其の住居・及び其の産業の分布に大なる急激の變更を加ふることは到底不可能にして、又假令可能にてもそは望ましからざる事なるや明かなり。人類の爲すべきことは、唯、事物をば正しき方向へ極めて徐々に變更することに在り。例へば英國に於いては、サセックス州の鐵職工及びウィルツ州の毛織職工をばヨーク州の方へ人爲的に遷すの必要は少しも起らざりしなり、然るに事實上斯かる分布の變更が行はれたるは、一方にはサセックス州に於ける鐵職工の減減したる事及びウィルツ州の毛織職工の増加せ

ざりし事を伴うて、他方にはヨーク州に於いて此等の職業が大に勃興發達したる事に因り、靜かに行はれたるものなり。

産業の集中（或は、地球上に於ける産業の不均等なる分布、と言ふ方一層安全ならん）を含める協働に對しては、往々「地方的分業」(Territorial Division of Labour) 及び「産業の地方分布」(localisation of industry) なる名稱が用ひらるゝことあり。

○(II) 分業の第二の大利益は、勞働をば人々の間に人々の固有の性質即ち天性が最も良く利用せられ得る様に、之を分配する事を得しむるに在り。古詩の聯句には「アダムは掘りイヴは紡けり」といふ、されきこは十四世紀の詩人の錯誤にして、近代の研究に依れば、寧ろイヴの方が必要なる總ての難事を行ひ、アダムは遊獵好きなる全くの「紳士」なりしが如し。蓋、原始人の方が最も良く協働を按排して其の利益を利用したるも

のなりと信すべき有力なる理由あることなく、寧ろ、強者の力は最難事の遂行には利用せられずして、却て之が負擔をば弱者に強うることに利用せらるゝの傾ありしなり。されき、ミにかく緊急の場合にありては、必要なる仕事の全體を老者、若者、婦女、小兒の間に各自の力の最良の使用を得べき様に分擔することの利益は、最も幼稚なる野蠻人にすら明知せられし所なり。而して此粗略なる分擔は、此等の各階級に屬する人々の種々なる天性を考量することに依りて、次第に改善進歩せしめ得べきものなるは言を俟たず。各階級の中には膂力及び身長に大小の差あり、又心的能力にも大小の別あり。尙綿密に之を視なば、或人は或特種の仕事に對して特別の心力又は體力を有し、又他の人々は他種の仕事に必要な力を有せり。されば、大膂力を要する仕事は之を強者に、又才能を要する仕事は之を惻發者に割當つるが如く、仕事の全部をば従事者全體

に對して、出來得る限り巧に之を分割するの優れるは勿論なり。茲に「出來得る限り」云ふ但書を必要とする所以は、前に、産業は何れも皆之に最も適當せる場所にて行はるべし、と言ふは誤なりと言ひたると同じく、分業に依り何事も皆最も適當せる人に依りて行はるべし、と言ふとも亦誤なればなり。或種の仕事に最良の適者たる人が、同時に又他の一種又は數種の仕事にも最適者たること屢々之あり、斯かる場合には、其人をも含める總ての労働者の特別の能力を考量したる上にて、其人が之を爲さば全體上最良の結果を生ずべき様なる労働をば、其人に配當することゝせざる可からず。然らば、仕事の或ものは最適者には割當てられずして、必ずや第二・第三・第四・又は第五流の最適者に割當てらるゝと云なるべし。實際にありては、分業の此第二の利益は、次に述ぶる第三の利益と相纏綿混合せるものなり。

○(三) 分業の第三の利益は、各種の職業に對する手先及び腦力の熟練並びに堪能をして一層多大ならしむるに在り。諺に「何事にも手出しする者は一事にも通ぜず」と言へるが如く、總ての必要物を皆自ら供給せざるを得ざる人は、爲すべき事甚だ多くして其の一をだも完全に習熟せんこと望み難かるべし。異種の労働が異なる人々の間に分配せられ、隨つて各人の労働時間の全部又は大部分が唯一種若しくは兎に角僅少の種類に費さるゝ場合には、各人は習熟に因りて得らるべき其特種の仕事に必要な特別の堪能を得るの程度一層大なり。又斯くせば、各人に對して教育又は思慮ある訓練に因りて得らる可き一層重要な熟練堪能を與ふるとも亦可能なるべし。人々に一種以上の困難なる職業に對する十分の訓練を施さんことは、人生餘りに短くして其の職業に對する僅か一種の職業に適當に訓練するにも尙其の生涯の一大部分を要す。

殊に普通所謂「科學的研究」なるものにありては著しく然り。かの自然力利用の新方法の發見は、近代にありては偶然に行はれたるもの、如きは寧ろ少く、多くは訓練を受け又自ら訓練するに數年否數十年を費したる人々にして初めて成就し得べき研究の結果として生じたるものなり。

分業の此利益は、前述せる第二の利益と混淆せるものなるは當然なり、蓋、或性質が一旦得られたる以上は、それは訓練及び習熟によりて得られたるか又はそれは「固有の」(original) 即ち「天賦の」(natural) 特質の結果なるかは問ふところに非ざればなり。何れの時にありても、世界の人口を形成せる人々は常に皆天然又は教育によりて或性質を與へられたるものにして、而して人類にこりて必要な問題は、此等の性質の起原如何に非ずして、唯之れが最良の使用を講ずることに在り。されば、其の天賦の性質又は固有の性質より觀れば或一業に秀でたる人々も雖も、彼等

が事實上他の業務に訓練せられ居るならば、そのまゝ之を其業務に従事せしめ置くを得策とする場合も屢々あるべきなり。労働若の天性に従うて分業するを得る事より生ずる利益を完からしめんが爲には、必要な教育及び訓練をば最良の方法にて配布することに肝要とす。されど、此は如何なる場合にありても至難の業にして、縱ひ將來の事をば詳細に亘りて正確に豫見し得らるゝ場合も尙然らん。況んや將來を正確に豫見するここは不能なるが故に、人々をば其の天賦及び後得の特質に従うて諸職業間に分置せんことを當り、其の正鵠を得んことは容易に望み得可からざる事なり。

○(四) 分業の第四の利益は、一代より後代へ移傳せられ得べき知識の獲得並びに之が保持を容易ならしむることに在り。此は以上論じたる熟練及び堪能の利益とは全く異れり。熟練及び堪能は既知の方法を有効に

使用することを得しむるものなれ共、知識は之と異りて方法そのものを教ふるものなり。思ふに分業なくんば、現代人の天然力支配の力を其の遠き祖先に比して甚だしく増大したる所の、かの種々なる發明及び發見は到底行はれ得ざりしならん。何となれば、何人も之に必要な特別の研究に十分専門的に従事すべき時間を有せざる可ければなり。又知識は一旦之を得ることも、分業なくては造り得ざる書籍器具等にして存せざらんか、其知識は屢々忘失せらるゝに至るべく、其他世界に於ける知識の保持は、分業なくては存在し得ざる所の、かの教育者なるもの、盡力に依りてのみ行はるゝ場合も亦多きなり。

○(五) 分業の第五の利益は、總ての種類の道具及び機械(仕事が行はるゝ、建物をも含むを)節約するに在り。此は即ち、分業は道具・機械の一定額をして「二層多く役立つ」としめ即ち益々之を有効ならしめ、随つて人類を

て分業なくんば高價に過ぎて使用し難き道具・機械の設備をも有利ならしむるを意味するなり。極めて單純なる仕事にても自己の職業以外の事を爲さんとするときは、適切なる道具なき爲に困難を感ずるは何人も經驗する所なり。又「何事にも手出しする者」は、單に不熟練なるのみならず、其の道具の設備も亦不十分なるものなり。若し人は皆あらゆる種類の仕事を爲すことを要せんか、其の大部分は現在よりも甚だしく効力少き道具・機械を以て之を爲さざるを得ざる可し。然るに實際にありては、此等の物は甚だ高價なる場合にても自由に之を設備することを得るは、分業ありて之を間斷なく使用することを得しむるが故にして、而して之を間斷なく使用することは、分業なくして各人皆完全なる設備を要する場合には、到底不可能なる事なり。

第四章 人口

Population

九二

假に一個の孤立人ありて、其者が世界全體を所有し居れり。考ふれば、其場合には人口問題（人類が多きに過ぎ又は少きに過ぐるが爲に生ずる問題）なるものは起り得ざるなり。又多數の孤立人即ち協働を行はざる多數人の住める世界を想像するに、斯かる世界に在りては此問題は起り得べし。雖も、而かもそは甚だ簡單なる形式にて起るに過ぎざるべし。即ち各人は、一方に於いては、他人の存在及び他人の行爲に依りて、只偶然的に利益を受くるのみ。例へば、他人が自ら防衛の爲に猛虎毒蛇を殺さば、己も亦之に依りて利益を受くるが如し。之と同時に他方に於いては、彼は他人の行ふ土地の占領及び有用動物の捕獲に依りて害を蒙るべく、而して此點に於いては、他人の數の多きに從ふて自己の地位は益々劣惡

なるべし。即ち人口數の多きに從ふて、各人に對する土地の割前は益々少かるべく、隨つて各人が農業及び其他の産業に用ひ得べき場所及び材料は益々少からん。而して凡て普通の場合にありては、人口數の多大なるより起る此不利は、之に伴うて生ずる利益と相殺して尙餘りあり。言ふことを得べきなり。

前述の場合と異り、若し人々の間に協働が行はれ居ることをすれば、縦ひ根本的の變化はなくとも、大に其事情を異にするに至るものなり。蓋し、隣人を有することの利益は、協働に因りて大に増進するものにして、そは單に、他人が他人自身の爲に野獸を殺したるに因りて、自己も亦其の襲來を免るゝが如き偶然的利益のみには止まらざるに至る。即ち協働行はるゝに至らば、人々は前述したる協働の諸利益を享受し得べく、而して其人數多からば、協働より生ずる此等の利益は益々増大し得べきなり。

然れども之にはたのづから限度あるものにて、即ち其利益は一人當ての場所及び材料が減少するの不利の爲に相殺せられ、其れより以上は之が不利の方却て大なるべき、或點が常に存在するものなり。されば、土地の一定面積の上に「過多」の人口を置くの不利は、遠き古へより既に認められたる所にして、例へば舊記に依るに、猶太人の祖エブラムは「甚だ家畜に富み、……彼と共に行きたるロットも亦多くの畜類及び天幕を有したるが、而かも土地は彼等を共住せしむるには足らざりき、……而して彼等は互に離散したり」云ふ。（註）し人類にして或地域の上に數限りなく住み得るものならんには、人類は悉く其の發祥地たるエデンの園の周り又はアララト山のほりの如き最良の沃野に密集したるならん。然るに斯くせずして人類が全地球上に散布するに至りたるは、一定地域の上には人口過剰が起り得るが故なり。而して已に地球の表面の一部分に於いて、

人口過剰の起り得可きこと此の如く明白なりとせば、斯かる部分の多くより成れる全地球の上に於いても亦、同じやうに人口過剰の起る事あり得可き筈なり。

此の如く説かば、人口論なるものは殆んご議論の餘地なき明白なる概括に過ぎざるが如く見ゆれども、實は頗る複雑なる歴史を有するものにて、之に關する或知識なくしては、今日經濟學書中之に關して普通論せらるゝ所を了解すること困難なり。敢て甚だしく遠きに遡るまでもなく、古代の希臘哲學者は、今日の經濟學者とは全く異なる觀點より人口を觀察したり。即ち彼等は經濟問題よりは寧ろ所謂政治問題に注意したるものにて、而して彼等の政治學なるものは、小なる都市國家に關する政治學なりしなり。されば彼等の研究したるは、或都市國家に於いて適當に統治せられ得べき人口數は幾何なるかにありて、最良の經濟的結果を得

んが爲めには一定面積の土地の上には幾何の人口が住むべきかを考究したるにあらず。是れ當時彼等の知れる多少顯著なる地方にありては、何れも其の人口は、其の増加が果して止むべきか、又若し止まば何時止むべきか、の疑問を起さしむる程著しく増加しつゝ、ありしもの無かりしが故ならん。其の後中世に至りても、歐洲何れの國の人口も、^{そが}限りなく増加を繼續する事は果して望ましき事なりや否や、の問題を起さしむる程迅速に増加したるものはなく、寧ろ、當時にありては、何人も人口減少を以て善事なりと考へし者無かるべしと思はるゝほぎ、人口減少に關する愁嘆の聲の盛なりしを聞くのみなり。第十七世紀に及びては、英國の人口は明かに増加したり、而して當時北米ヴァージニア洲の殖民に關係せる者は、若し一層多數の人々が海を超へて彼地に渡航するこゝに、ならば大に得策なるべしと論じたれども、而かも彼等の議論は未だ何等

一般的理論を出現せしむるに至らざりき。次いで第十八世紀に及びては、打續きたる大戦争のため、各國民は毫も經濟上の結果を考慮せずして唯出來得るだけ大なる人口を希ふに至りたり。斯くて、第十八世紀の末に或著者の言ひたる如く、「人口！人口！何は兎もあれ人口！」と云ふ聲は、全歐洲を通ずる一般の叫びなりき。

人口論の歴史は、實際は漸く第十八世紀の中央に始まれるものにして、即ち當時或學者の間に起りたる、世界の人口に關する論争、否寧ろ「古代諸國民の人口稠密の度合」に關する論争に其の起原を發したるものなり。或學者は人口數は近代に於けるよりは古代に於いて一層多大なりしを主張し、又他の學者は反對の意見を採り就中ヒューム氏 (Hume) は其の最も優れたる者なりき。當時論壇の形勢此の如くなれば、學者其間に出で、若し人類の生殖力が何等の束縛なく働き、而して其の死亡率は正常

なりたらんには、人口は如何に迅速に増加すべきやを立證し、以て或派の主張を高調せんとする者あるに至りしは、自然の成行なり。一七五三年ロバート・ウォレス (Robert Wallace) の試みたる所は即ち其れなり。氏の企てたる所は、人口はノアの大洪水よりアレキサンダー大王時代迄の間に大なる増加をなし、其期間の終にありては既に第十八世紀に於ける人口よりも一層多大なりし程なる事、敢て想像に難からざるをこゝ示さん。欲したるものにして、氏は一表を作製して、若し一夫婦に六兒ありて其内二人は親なる前に死亡するものみせば、千二百三十三年間に總人口は二人より四千百二十億人以上(四千百廿三億千六百八十六萬〇四百十六人)に増加すべきことを示したり。斯かる表は、氏の言へる如く、「人類の蕃殖力によりて容易に生じ得べきが如き巨大なる人口数は、何れの時に於いても、未だ曾て世界に存在したること無き」ことを明白ならしむる

ものにして、又斯かる表は、然らば「人口の増殖を抑制したる事情は果して如何なるものなるか」の研究を必要ならしめ、更に進んでは、「此等の抑制的勢力は除去され得るものなりや否や」の考究を誘起するものなり。

ウォレス氏は、此等の事情の或ものは物理的のものにして、人類の意志より獨立せるものなりと斷じ、又他の事情は人類の過誤及び悪習に本くものにして、優良なる政府に依らば其の大部分は除去せられ得べし。雖も、而かも如何に完全なる政府に依るも全然之を除去するは不能なりとせり。

氏は曰く、「完全なる政府の下に在りては、家族を有することに関する不便は悉く除かれ、小兒は良く養育せられ、萬事が人口繁殖に甚だ好都合なるが故に、縦ひ或季節の間には多くの病者を出し、又或特殊の氣候に於いては恐るべき疫病の流行を來し、之がため多勢の人が殺さる、

こゝありしするも、なほ人類は益々増加し、終には地球が人口過多となりて到底之を維持するこゝ能はざるに至らん」。

氏は又曰ふ、縦ひ人口「維持の或非常なる方法」が発見せられたりするも、やがて「地球面には彼等の身體を容るゝの餘地すらなきに至るべければ」、そはたゞ到底不可避なる事をば一時延期するものに過ぎざるべく、又「土地の沃度には限度あるこゝ、及び土地の廣表は今まで知られたる範圍にては常に同一不變にして、恐らく太陽系に著大なる變化起らざる以上、さしたる變化無かる可きこゝも亦確實」なれば、「かの空想的計畫の熱心なる主張者等は、其計畫が終に破滅に終るべき最後の日あるこゝを覺悟せざる可からず」。

思ふに人口にして妄りに増加せんか、遂には之に對して野蠻不自然なる調節を加ふるに至るべきが、而かも人類は斯かる調節を調和し難く、常に之を争ふを免れざるに至るべし。

次いで、マルサス氏 (Malthus) は一七九八年其の著人口論 (Essay on the Principle of Population) に於いて、ウィリアム・ゴドウィン氏 (William Godwin) の理想郷的無政府主義を駁論する爲にウァレス氏より此議論を借用したり。

氏は即ち論じて曰く、人口(氏は人口をいふ代りに時に人口の原則 Principle of population) も云へり) は之を抑制せざる可からず、而かも總ての抑制は結局皆罪惡又は貧窮に歸着するものなれば、随つて理想郷なるものは到底可能なるを得ず。然れども氏は、單にウァレス氏の如く、人口の増加は最後に至つて一大破滅に終らざるを得ずと想像せしに止まらずして、「其困難は決して遠き將來に起るに非ずして、直接焦眉のものなるべし」と考へたり。氏が斯く考へたるは、氏が自ら發明したる甚だ惑はしき數學上の計算の爲に、自ら欺かれたるなり。氏曰く「人口は之を抑制せざれば幾何比にて増加す。然るに生活資料はたゞ算術比にて増加するに過

「ぎす」に。而して氏が幾何比に依る増加を以て擧げたるもの、一例は、廿五年毎に二倍なる場合にして、又氏が算術比の一例を以て擧げたるものは、廿五年毎に最初の額に等しき額だけ増加する場合なり。扱て此等二種の級數即ち一・二・四・八……三・六・一二・一八……を並列せんか、第二項以下は前者が後者よりも甚だしく迅速に増加するこゝは明白なり。是れ氏が「生活資料に關する困難よりして、人口の上に有力に且間斷なく働く所の抑制」なるもの、所詮存在せざる可からざるこゝを推論したる所以なり。人口は廿五年毎に倍加するものなりといふ氏の立言は、北米の實例に頼りたるものなるが、此點に於いては氏は鞏固なる基礎に立てるものなり。何となれば、氏の假定したる期間は、或は氏の考へたる如く實際よりは長く見積られたるものなりとするも、或は之を異り實際よりは短くなり居るにせするも、兎に角抑制されざる人口は餘り長からざる

或年數の間に倍加すべき事は疑無ければなり。乍併、生活資料が「算術比」を以て増加するに止まるといふ立言に關しては、即ち廿五年毎に最初の額に等しき額づゝ之を増加せしめ得るに過ぎずとの主張に關しては、氏は全く何等の證憑を有せずして、單に漠然たる想像に憑りたるのみ。蓋、同じく之を北米の實例に就いて觀察するも、現存人口が其れよりも甚だ少數なりし祖先に比して、現に劣等なる生活をなし居らざる以上、其の生活資料も亦人口と同じく幾何比にて増加したるものなりを信ぜざるを得ざるに拘らず、食料問題に關しては氏は眼を、此北米の實例より轉じ去り、かくて氏は讀者に對し「何所にては世界の或地點、例へば我英國に就きて、其の産する生活資料は凡そ如何なる割合にて増加しつゝあるやを考へ見よ」の言へり。

氏は曰く「若し最良の政策に依り、益々多くの土地を開拓し、又農業に

大なる獎勵を行はゞ、英國の產物は最初の廿五年間に於いては或は之を倍加するを得可きこと、余の認むる所なれども、恐らく之を以て最大限を越すべく、何人にも雖も之より以上の事を認めよと要求する者は無かるべし。

「即ち、更に進んで、次の廿五年間には產物が四倍せられ得んことを想像するは不能にして、此の如きは土地の性質に關する吾人の總ての知識に反するものなり。精々吾人の考へ得べき事は、第二の廿五年間に於ける増加は最初の產額に等しかり得べき事にあり。されば、こは尙ほ實際を距ること遠けれども姑らく之を以て吾人の定則に假定し、かくて英國の生産總額は、大なる努力に依つて、廿五年毎に、現在產出する額に等しき生活資料額をば順次増加し得るものと假定せよ。思ふに如何に狂熱的の空想家にも雖も、これ以上大なる増加を想像すること能はざらん。斯

く假定せば、數世紀ならずして此國の地積は到る所悉く化して庭園の如くなるに至るべし。而かも其増加比例はなほ明かに算術的なり。されば、生活資料は算術比にて増加するに止まること言ふも敢て不當ならざるべし。」

果して、氏の所謂「狂熱的空想家」は、大英國の產物が一七八九年以降五十年間に到底四倍せられ能はざること認めたりや否やは疑はしき雖も、そは兎もあれ、マルサス氏は未だ以て其の議論を證明し得たるものと謂ふを得ず、何となれば、北米の諸植民地にありては、上述の期間内に其の生産物は二倍となり又四倍となりたること明白なればなり。何所にもせよ苟くも此事實が嘗て起りたることある以上、生活資料は廿五年毎に前より等しき額だけ増加し得るに過ぎずと云ふ事を、一般的命題として立言するが如きは誤なり。加之、假令吾人は此命題を以て、一七九八年當時

に於ける大英國と同じく、人口稠密なる國々のみに之を限るものとするも、(氏自身も其心中には無意識的に之を斯かる國々に限りたるが如し)、なほ氏の議論は、恰かも夫の幾何學の受験者が、問題として提出される命題をば正確には證明し得ざりしも、少くも甚だ眞らしく之を解説し得たり、ミ主張するに似たりミ云ふべき歟。大英國の産物が五十年間に四倍され得ざることは、普通の人々には、或は大に眞らしく見ゆべく、又其後廿五年毎に二倍加を繼續し行く能はざることも、或は確實に見ゆるならん。彼等は又次の世紀間廿五年毎に、一七九八年の産額ミ同額以上宛、増加せられ能はざる事すら信じ難からざるべく、又同等額づゝすらも、廿五年毎に限りなく増加を繼續し能はざる事(氏はこの明白なる反映事をば指示せざりしミ雖も)をも或は信じ得るならん。然れども又他方には、或は、何故に斯く増加し得ざるか、諺にも神は一口ミ共に一對の手を與ふ

ミ云ふにあらずや、然らば曷んど増加せる人口は之に比例して生産額を増加し得ざるの理あらんや」ミ反問せん人も亦あり得可きなり。ミ向本文三行読ミミ思、地何然るに此等の疑問に對するマルサス氏の答辯は、只「土地の性質に關する吾人の總ての知識に反すべし」ミ言へる句の中に、曖昧に含蓄せしめられたるものを除きては他に何物もなし。「土地の性質」に關する普通の知識に本き吾人の知る所に依れば、一定面積の土地に投ぜらるゝ労働の分量は縦ひ之を無限に増加し得るものミするも、其土地より無限の産物を獲ること不可能なるものなるが、なほ此外、實際上に於いて一層重要な關係を有する所の事實あり。そは他なし、吾人が一定面積の土地の上に次第に一定量の労働を投じ行くに當り、若し或點以上に達する時は、其一定量の労働を増加することに依りて増加すべき生産物の分量は、次第に減少し始むるものなるの事實是なり、而して其點は、其増加分の労働が毫

も收穫 増加を齎すこと無きに至る點よりも以前に位し、屢々、否寧ろ一般に、之よりも遙か以前に位するものなり。此事實は、テュルギー氏(Thurley)が、一七六八年頃、佛國リモージの國立農會の懸賞應募文の或ものに對して下したる評論に於いて、氏の明白に記述し居る所なり。氏曰く、
 「本來の性質は肥沃なれども而かも全く手入れせざる土地に投ぜられたる種子は、殆んど全然浪費の支出たるべし。然るに其土地が一度耕されんか、産物は増加すべく、而して之を耕すこと二度三度重ならば、産物は常に二倍三倍するに止まらずして、四倍又は十倍にも上るとあるべく、斯くして産物は、費用との比較上最大なるべき或點に達する迄は、費用よりも大なる比例にて増加すべし。されど一旦此點を過ぐれば、費用の増加に従ひ産物は依然として増加するも、而かも其増加の割合は次第に且絶えず減少し、終には土地の生産力は涸渇し、技術は其れ以上

如何にも爲す能はざるに至り、費用の増加は毫も産物を増加せざるに至るべし」^{Thurley}

然れども、此記述は或一定の時にのみ適用せらるゝものにして、随つて、人類の知識及び其他の諸事情の變化に依り、「産額が費用に比して最大なるべき或點」の位置を變じ、又は土地の生産力が涸渇し技術は其れ以上如何にも爲す能はずして「費用の増加は毫も産額を増加せざるに至るべき」終極點の位置をも時に變更するものなる事は、全く之を考慮の外に置きたるものなり。然るに實際にありては、人類の知識及び事情は絶えず變化しつゝ、あるものにして、而して其變化は、此等の點をば増加労働の生産力に取りて好都合なる方向に轉ぜしむべき性質を有する場合甚だ多く、恐らく大多數の場合に於いては皆然り。されば、土地の性質に關する普通の知識は、人口は如何なる時にありても或大きさを超て増大すれば、

然らざる場合に比し、必ず産業の收穫を少からしむるものなる事を教ふるものなれども、而かもそは、人口が廿五年間に倍加し、五十年間に三倍し、七十五年間に四倍するの不能なる事を教ふるとなく、又人口は收穫の減少を惹き起すことなくして廿五年毎に二倍し、五十年毎に四倍し、七十五年毎に八倍するの不能なる事をすら教ふるものに非ず。たゞ精々吾人の言ひ得べきことは、斯かる急速なる發達は、恐らく永く繼續すること無かるべく、少くも決して永久に繼續するものには非ずといふことは是なり。

マルサス氏自身は、其の人口論をば、かの前掲テュルギー氏の文章中に在る生産の法則と密接の關係を保たしめんとせしに非ず。思ふに此法則は、過度なる耕作をもし得べき十分なる資力を有せる思慮ある農家の心中には必ずや常に潜在し居たるべく、又上述の如くテュルギー氏は既

に一七六八年代に之を明言し居たるものなれども、而かも其の歴史の眞に始まりたるは、實は一八一四年以來の事なり。當時英國に於いては新たに穀物輸入税の設定を見たりしが、此新税は穀物の價格をば引合ふべき點に維持せんことを目的とせしものなれども、之に就いては諸種の議論紛起したり。而して穩健なる人々は小麦を一クォーターに付き凡そ八十志を以て適當と考へたれども、農業家の大多數は之よりも頗る多額を要求したるが如し。斯くて其爭論の結果は、世人をして、一方には戦争の間其の輸入殆んど不能なりしと共に他方には天候の不良及び人口の増加の爲に起りたる穀價騰貴の結果として、輒近に開耕されたる新しき土地の耕作費に關して、幾分の注意を拂はしむるに至れり。然るに總ての専門家は皆新地の耕作は甚だしく多費なるを認めたるが、此事は當時の極端なる保護論者が、彼等に取りて大に有利なる議論となせし所なり。

何故ぞいふに、彼等の主張に依れば、若し保護なきため穀價下落せば、新たなる土地は其の耕作を繼續し得ざるに至るべく、然らば則ち（彼等の言ふ所に依れば）穀物の産額は減少し、而して穀價は再び騰貴するに至る可ければなり。之に對してマルサス氏・リカード氏・及び兩氏ほごの名聲は無けれども而かも秀拔なる學者たりしサー・エドワード・ウエスト氏 (Sir Edward West) 等は皆、晩近の穀價騰貴は新たなる土地が舊き土地よりも劣悪なるの結果なる事、又穀物にして幾分なりとも輸入せられれば耕作は優良地のみに限られ、斯くて其の生産費を減少し随つて其の價格を低廉ならしめ得べきが故に、畢竟穀物の輸入を許すこゝは、穀價を高むるよりは寧ろ之を低廉ならしむるものなる事を論じたり。

リカード氏もウエスト氏も共に、其の議論を説明する爲に、數字的の例示を以て、耕作の進歩に關し簡單なる假想的の歴史を書きたりしが、

之に依れば、彼等は、最も豊饒にして且最良の地位を占むる土地が最初に耕作せられ、次いで、人口増加し益々多くの供給を必要とするに従つて、益々劣等の土地が規則正しく順次に耕作せらるゝに至るものご想像したり。彼等は、舊土地に投ずる勞働を増加するこゝに依りても亦供給を増加し得る事は之を認めれども、併し勞働を新土地に投じて之を獲るも、又は之を舊土地に増投して之を獲るも、將た又實際行はるゝが如く、一部分は前者に依り一部分は後者に依りて之を獲るも、兎に角一定の農業に對する收穫は遞減すべきもの也ご考へたるなり。ウエスト氏は曰く、

「其……原理に依れば……農業に投ぜらるゝ勞働を次第に増加し行く時は、各一定量の勞働は事實上次第に減少せる收穫を生ずるに至るものにて、且、斯の如く一定量の勞働の各増加分が事實上減少せる收穫を生

するものこそば、農業に投ぜらるゝ全體の勞働も亦事實上次第に減少せる割合の收獲を生ずるものなるや勿論なり。之こそ異り、製造業にありては、等量の勞働は常に同一量の製造品を製出するものなるを明白なり」云。

ウェスト氏の此「原理」(Principle)は、其後「農業に於ける收獲遞減の法則」(the law of diminishing returns in agriculture)てふ餘り適當ならざる名稱を獲たるものなり。而してこの收獲の遞減なるものは、所謂「改良」(improvements)即ち發明及び一層優りたる耕作法の採用に依りて、其の實現を妨けらるゝとあるは、當時已に認められたる所なれども、而かも尙、此等の變化は其の效果只一時的のものにして、到底長き間に亘り一般の原理に反して行はれ得べきものに非ずとされ居たるが故に、詮する所收獲遞減は歴史を通じての一般的法則なりと考へられ居たるなり。勿論此説は甚だしく吾人日常の觀察の結果に反するものにして、斯かる説が會て承認せられた

る、こそありと殆んご信ぜられざる程なれども、而かも此説は當時一般に認められ居たる利潤に關する謬説に依りて支持せられ、かの一般利子歩合の下落てふ歴史的事實の如きも、即ち收獲遞減の一例證に外ならざるものと認められたり。

人口の増加は農業に投ぜらるゝ一定量の仕事に對する報酬を減少せしむるの「傾向」(tendency)―「改良」に依りて只一時妨けらるゝのみなる一般的傾向といふ意味の傾向―を有すてふ一八一四年代の學説は、固より「法則」(law)と看做し得べきものにあらずして、只英國史上例外的時代に行はれたる觀察に基く燥急なる誤謬の概括に過ぎず。されば、此暗黒時代の記憶が漸く消散し始むるに至るや、學者等は一の事實論として、農業の收獲は人口の増加に拘らず時代の進行に伴ふて著しく増加したるものなる事を指摘し始むるに至れり。彼等の一人は曰く、

「一三八九年に於いては、二百エーカーの土地より穀物を收穫するに、一日に二百五十人乃至二百人の刈手及び貰手を備ひたるにあり。又同年に小麥十三エーカー及びオート麥一エーカーを刈り且つ束ぬるに、一日に二百十二人を備ひたる日もありたり。當時は一エーカーに付き十二ブッシュェルが平均收穫を考へられたれば、畢竟穀物百六十八ブッシュェルを收穫する爲に二百十二人が備はれたる計算なるが、斯の如きは今日にありては僅か五六名の人數にて容易に仕遂けられ得べき作業なり」。

此種の統計は之を得るに困難にして且必ずしも常に信用し難しき雖も、而かも普通何人にも雖も、農業の生産力が非常に増加したる事に就いては毫も疑を挟むこと無かるべきなり。文明社會に於ける人々の食料は著しく豊富になれり、而かも食物獲得の爲には、從來に比して其の全體の勞力中遙かに少き割合を費すに過ぎず。若し農業上の收穫にして其の

割合を減じたりせせんか、人々が從來に等しき生活を繼續し居る以上、食物生産の爲には世界の勞働の益々大なる割合が之に費されざるを得ざる筈なり。

斯くて已に歴史上に於ける農業の收穫増加を無視すること能はざるに至るや、人口増加の結果に關し悲觀論を採らんさせる人々は、自ら其の論據を變更せざるを得ざるに至りしものなり。即ち彼等は新たに説を爲して曰く、吾人の意味する所は、人口の増加は收穫遞減の傾向を伴ふに至るに云ふに在らず、詳言すれば、人口増加に伴ふ收穫の遞減は、一時的の妨害を受くる場合の外、一般的趨向として生じ來るものなり云ふに在らずして、只人口の増加なかりし場合に比すれば、其收穫は次第に減少するの傾向を有すに云ふに在り。即ち彼等の考ふる所に依れば、「改良」又はミル氏の所謂「文明の進歩」の爲、歴史上の事實としては農業

上の收穫は現に人口の増加につれて増加し居れり。雖も、而かも本來人口の増加は常に農業の收穫を減少せしむるの傾向を有するものにて、随つて收穫は實際には増加したり。若し人口にして増加せざりしならんには、其收穫増加は尙一層大なりし筈なり。いふなり。

此論は、若し之を全人類の全歴史に適用せん。せば其の誤謬なること明かなり。何となれば、若し世界の人口が二人又は幾人にも開闢當初の數を想はるゝ少數にて止まりたらんには、農業の生産力は今日の現状よりも遙かに大なりしならん。主張するが如きは、一見して不條理なること明かなればなり。若し人口が斯かる少數に止まりたらんには、今日まで起りたる「改良」なるものは到底發見せられ採用せらるゝこと無かりしならん。若し又此論を以て、單に比較的新らしき時代にのみ適用せん。とするも、(ミル氏は斯くせん。と思ひたるが如し、之が立證も又之が反證

も孰れも可能ならざるに似たり。ミル氏は、假令人口は増加せざりしとするも、今日まで行はれたる總ての改良は、今日全く同様に行はれたるもの、如く平氣にて假定し居れども、吾人は斯かる事を假定する能はず。即ち吾人は、若し世界の人口が一八〇〇年代に於けると同數に止まりたらんには、其後ミル氏の時代に於いては諸種の改良發明は果して如何なりし乎、又若し人口がミル氏の著述をなせし一八四八年代の實數(氏は之を以て已に十分の多數を考へたりに止まりたらんには、今日の狀態は果して如何なりしならん乎等に就き、正確に之を知るべき手段を有せざるなり。

元來、人口増加は望ましき事なるか又は望ましからざる事なるかの問題は、全然之を農産業の收穫上に及ぼす影響のみに依りて解決し得べき問題に非ず。人類は麵麩のみにて活くるものに非ず、其他あらゆる種類

の貨物を必要とす。而かも收穫遞減の法則なるものは、農業及び其の他
 鑛業の如き、所謂「採取産業」(extractive industries)に屬し、直接に土地の沃度に依
 りて左右せらるるを認めらるゝもののみ適用する可きものとて、唱へ出
 されたるものに拘る。而して他の産業殊に製造工業にありて、労働者數
 の増加に依りて生産量を増加する場合には、分業行はるゝが故に、却て其
 の收益を遞増せしむるもの也と考へられ居たるなり。

斯の如く、人口の増加は、縦ひ農業の方面に於いては其の收穫を遞減
 するの傾向を生ずるも、之と同時に他方に於いては、製造工業上の收
 獲を遞増するの傾向ありと認められたるが故に、随つて此二傾向の結果
 の間に差引勘定をなすことを要するに至れり。即ち、總ての種類の産業
 全體に亘りて收穫遞減の起るは、農業に於ける減少が製造工業に於ける
 増加に依りて相殺され能はざる場合にのみ限らるゝこととなるなり。而

して、斯かる場合を以て普通の場合なりと考へたる者はよもや有らざる
 べしと思はるれども、而かも實際に於いては、既に述べたる如く當時一
 種の利潤論行はれ居り、而して其の主張者は、利子歩合の下落てふ歴史
 的事實を以て、少くも労働者の需要物を生産しつゝある總ての産業に
 於いて、收穫遞減の行はれつゝあるの證據たるものと爲したるのみならず、
 第十九世紀の初期に於いては、勞賃を以て食物と同一視するの思想一般に
 行はれ居たるが故に、此等の事情は相俟つて、農業の重要を過大視する
 に至らしめたり。其の結果、人口の増加は、總ての種類の産業全體に亘
 り收穫を遞減せしむるの傾向ありと主張せらるゝに至り、且當時の悲觀
 論者は當時已に此傾向現はれ來りたりと信じ居たるものなり。

然れども、今や吾人は、一八一四年代に於いて農業と製造工業との間
 に設けられたる劃然たる區別を排除せざるべからず。テュルギー氏の法

則は、製造業に關しても亦農業に關するに同じく眞理なり。即ち或一定時に於いては(又は事情に變化なければ、言ふも可なり)或點までの勞働の増加は、増加せる割合の收穫(收穫遞増を略稱す)を伴ふものにして、此點を過ぐれば、それ以上の勞働の増加は、減少せる割合の收穫(收穫遞減を略稱す)を伴ふものなり。人類は無限量の小麥を生産し能はざるに同じく又無限量の織物を生産し得るものに非ず。如何に多數の勞働者が之に従事するも、或量以上に生産するに不能なるべく、而して其量に到達する遙か以前に於いて、増加勞働の各單位の生産し得べき織物の増加量は減少し始むべきなり。或一定の時に於いては、換言すれば、知識及び事情に變化なき場合には、勞働の量が増加しても又は減少しても孰れも收穫の割合を減少すべき點、即ち最大收穫點も稱し得べき或點の存在するものなり。かの、農業を以て殆んき土地の固有の沃度及び人類の筋力の

強度に依りてのみ左右さる者ごなし、そが世界に亘る人類の協働に依りて—この人類の協働なるものは、農業に對して然るべき道具と種子とを供給し、又各地方の産物を結合し之をして消費者の爲に享樂し得べきものたらしむ—影響さる、所多きを看過するが如きは、農業の觀念として甚だ粗笨幼稚なるものと言ふべし。吾人が農業と製造業とを對照して精々言ひ得べき事は、唯、大なる總量の生産を行ふの利益、随つて又大なる總量の生産及び消費をなすに當りて人口の大なることより生ずる利益は、農業に於けるよりも製造業に於いて一層明白なりといふ事に過ぎず。若し、歴史上に於ける人口進歩の暗示する所に依り、又一八一四年代にマルサス氏、ウエスト氏及びリカード氏の假定したる所に依り、收穫をば皆無の點より出發して測量せんか、吾人は農業に於いても又製造業に於いても孰れも、收穫は或點までは増加し此點を超ゆれば減少するものなりと言

ふこまを得べく、又若し余の最大收穫點を稱したる點を以て出發點とせんか、吾人は農業に就いても又製造業に就いても共に、此點より孰れの方角に動いても收穫は即ち減少すと言ふこまを得るなり。

若し如何にかして總ての困難を排除し、あらゆる産業全體の收穫を測量し得る假定せば、吾人は、或る一定の時に於いては、即ち知識及び事情に變化なき場合に於いては、各産業に最大收穫點の存在すると同様に、總ての産業全體の上に於いても亦必ずや斯かる點の存す可きものなるを知るべし。而して若し人口が總ての産業をして此點に到達せしむるに足るほき多大ならざる場合には、然らざる場合よりも收穫は少かるべく、而して之が救済法は即ち人口の増加に在り。之に反して、人口が此點を超過する以上に大なる場合に於いても、收穫は然らざる場合に比し矢張り少かるべく、而して之が救済法は人口の減少に在り。

最大收穫點なるものは、特定の産業に對しても又産業全體に對しても、決して之を永久不動のものなりと誤解せざらんこと甚だ肝要なり。此點の位置は、智識の進歩及び其他の變化に由りて、絶えず變更されつゝあるものなり。例へば作物輪裁法の發見及び汽車の發明は、之に必要なる設備の施設と相俟つて、常に收穫の遞減及び其の結果たる富の減損を伴ふこと無くして人口の増加を可能ならしめたるのみならず、又同時に、其の増加を望ましき事たらしめ、又は望ましき事たらしむるの傾向を生じたり。即ち此等の變化は、最大收穫の點を遷して、大なる人口に好都合なる方向に其の位置を變更したるなり。されば、斯かる最大收穫點の變更に依りて、地球上の人口は現今の十分の一も無かりし過去の或時代に於いて、既に世界が人口過剰を起したることもあり得べく、又それに抱らず、今日は却て人口過剰の起らざることもあり得可きなり。

人口論の發展が從來執りたる經路の結果として、甚だ不満足なる幾多の用語の使用を馴致するに至りたれども、此等は何れも絶対に排斥すべきものなり。即ち學者等は、唯、收穫は未だ遞減し始めざりし事を意味する場合に、之をば「收穫遞減の法則は未だ其の作用を現はすに至らざりし」と言ひ、又單に、收穫が一時遞減を止めたる事を意味する場合に、此法則は「一時的抑制を受けつゝあるものなり」と稱したり。又彼等は目下收穫を遞減するに無くして其の供給を増加し能はざる貨物を意味する場合には、之を「收穫遞減の法則に従ふ貨物」と稱し、又目下其の供給を増加せば遞増せる收穫を伴ふべき貨物を意味する場合には、之を「收穫遞増の法則に従ふ貨物」と稱したり。のみならず彼等は「收穫不變の法則に従ふ」てふ中間種のものすら想像したり。然れども總て此等の用語は皆、「法則」なる語の濫用に陥りたるものなり。凡そ科學上の法則なるものは、總

ての時及び總ての場所に於いて眞なることを要し、「一時的抑制」を蒙り若しくは其の作用を妨げられ、又は之に反對なる法則に依りて忽ち代位せられ得るが如きものなる可からず。例へば、重力の法則は、ニュートンの林檎が木より落つるに至る前は未だ其林檎に關して働かざりし也なき言ふ者無く、又若しニュートンが林檎が落ちんさせるときに之を捕へたれば、て、重力の法則は之がため一時的抑制を受けたる也なき言ふ者も全く之無かるべし。又吾人は降下しつゝある風船は「重力の法則に従ふ」ものなれども、昇騰しつゝある風船は「昇體の法則なる他の法則に従ふ」ものにして、又同一水平に停止せる風船は「高度不變の法則に従ふ」もの也なき言ふことは無きなり。

若し吾人にして最大收穫點のみを以て出發點みなさんか、吾人は、收穫は孰れの方向に於いても遞減するものなりと言ひ得べく、又あらゆる

貨物又は産業は、何れの時何れの所に於いても、常にこの「收穫遞減の法則」に従ふものなりと言ふことを得べきなり。然れども、此語は誤り易き連想を起さしむるものなれば、或は、チード氏 (Ceed) の提言を採用して、「收穫遞減」(diminishing returns) なる語の代りに「收穫不比例」(non-proportional returns) なる中性語を用ふるも亦可ならん歟。

第五章 社會的制度

Social Order

吾人は、孤立人の物質的福利即ち富は、如何に其の固有の性質に依り、又彼が此性質及び其の外界の環境の上に行ふ改良に依り、又彼が其の力及び環境を使用するに當りての判断及び意思に依り左右さるゝものなるかを説明したり。又吾人は更に進んで、社會の富も亦之と同一の諸要件に依りて左右さるゝ外、之に加ふるに、協働の完全の度に依り、又其の人口が最良の結果を生ずる爲に必要な點に接近せる程度に依りて左右さるゝものなる事を説けり。然るに今、此等の諸條件に關する社會の地位を良好ならしめんが爲には、社會の組織其當を得んとを必要とす、詳言すれば、人民の固有の力を大ならしむると、其の力及び其の環境が十分に改良せらるゝと、協働が適當に發達すると、人口が適當なる大さ

に接近すると、人民の労働の量並びに方向に關して適當なる決定が行はるゝと、等を期し得べき適切なる機關を有せざる可からず。

一派の人々は、吾人をして、現在は全く何等の組織も存せざることを信ぜしめんを欲せり。彼等は「富の奪ひ合ひ」「自殺的競争」「掠奪」「利潤の追求」等の激語を放ち、而して現今の状態は「渾沌」たるものなりと言ふ。然れども、今日の状態は縦ひ如何なるものにせよ、又如何に不満足なるものにせよ、そは決して渾沌たるものには非ず。若し果して渾沌たるものならんには、日々の仕事に赴く者は悉く愚者たらざる可からず、何となれば、仕事に赴かずして家に留り又は誤樂の爲め他に行くも、日々の麵包を得るの望は仕事に赴きたる場合を異らざればなり。吾人が或行爲に伴ふて殆んぞ確實に或結果の生ずる事を知り且之れを實行するの事實は、即ち吾人は決して渾沌中に生活するものに非ざることを證するもの

なり。現在の制度は或は惡制度ならん、されど是亦一種の制度にして渾沌にはあらず。書物にても餘りに鼻先近く持ち來る時は之を讀むこと能はざるに同じく、産業界に關しても亦、餘り近き立場より之れを觀る時は、吾人は只其の汚點を見得るのみなり。嘗てグラッドストーン氏はボナミー・ブライス氏が愛蘭土に對して行はんことをせし立法を非難し、ブライスは恰かも木星乃至土星の住民に對して立法せんことを、あるに似たりと言ひたりしが、之に因りて「グラッドストーンは經濟學をば土星に追放したり」の俗言を生ずるに至れり。今グラッドストーン氏の此隱喩を採用し、土星には學問の進歩を目的とせし一協會ありて、其の經濟部には、地球面に行動せる人類を觀望し得べき巨大なる望遠鏡を備付け、之に依りて其の觀得たる地球上の事件を報告しつゝある委員ありとせよ。果して彼等は、憐むべき人間共は實に渾沌の狀を呈せりを報告するならん乎。

各人皆我利の爲に争奪して他人の不利を醸し、爲に一般の利益は全く顧みられざる状態なり。報告すべき乎。又彼等は、地球上に於いては、最も便利の地位に在る土地は悉く放置せられ、何人も頭上に屋根を有する者なく、各人皆何の目的もなく奔走しつゝあるか、然らざれば只徒らに座して餓死に類しつゝあり。報告すべき乎。若し彼等が地球上の或人々。或會談を爲すこゝを得て、且其の告げられたる所を悉く信じたらんには、或は此種の報告をなすやも知れざれども、若し然らずして、彼等自身の觀察に依りて判断したらんには、決して斯かる報告を爲さざる可きや明かなり。

寧ろ彼等は、地球の住民は甚だ秩序ある人民にして、不思議なるほゞ軋轢なしに、全體の者が良く協働を爲しつゝあり。報告するならん。即ち毎朝隊をなして續々家を出で、あらゆる交通機關を利用して無数の異種

の仕事に趣き、而して總て此等の仕事は兎も角互に良く相調和適合して、巨大なる人口全體は之に依て皆衣食住を得居るもの、如しと言はん。勿論彼等は其装置が完全なり。是は保證せざるべし。彼等は時々種々の不始末及び故障の起り来るを見るべし。例へば、往々過多の車輛が一街路を通行し、過多の旅客が一の汽車又は電車に乗らんとて相争ふを見るならん。又彼等は、例へば吾英國に於いて、或田舎道をば同一種類の仕事を索めながら而かも反對の方向に辿りつゝある悼ましき人々の有様をも見るとあらん。又一方には、自己及び他人を害すると無くして、之を處分すべき方法を知らざる程に多くの物を所有せる人々あるか。見れば、又他方には、健康にして幸福なる生存を維持する爲には明かに不足なる程僅かの物しか所有し居らざる人々あるを見ん。然れども、此等の缺點あるに拘らず、彼等は、其機關は、其の正確なる性質の如何は姑らく舍き兎も

角大體に於いては、頗る有効に其の働きを爲しつゝあるが如しを報告するならん。而して若し彼等は五百年又は一千年の昔にも遡りて觀察し得るものも假定せば、彼等は恐らく尙一層好都合なる報告をなすべし、何となれば、彼等は過去に於いて非常なる改良の起りたる事を見るべく、而して今まで起りたる總ての變化は、一として、現在の組織が過去の制度の秩序的發達の結果に外ならざるを示さざるもの無きを見るべければ也。

余は、現在の社會の機關が能く其の働きを爲しつゝある事を確く主張する者なれども、而かも這は、之を以て、總ての點に於いて、考へ得らるべき最善中の最善のものなりを主張するの考にはあらず、只苟くも我經濟學を正當に理解せんを欲せば、先づ其の機關の缺點の考察より始むべきに非ずして、其の構成及び作用中に含まれたる主要なる原理の考察より始むるを必要を信するが故なり。吾人の目を驚かし又屢々吾人の同

情を刺激するものは寧ろ其の缺點にあるが故に、吾人はさかく先づ之が缺點の考察より始むるの傾あり。例へば七パーセントの無職者は、他の九十三パーセントの有職者に比し、遙かに吾人の經濟的考究を促し易く、又餓死せる一人の憔悴せる屍は、衣食足りて安樂なる十萬人の身體よりも、吾人の心に一層の印象を與ふるは自然なり。然れども若し、何故に仕事及び食物が良く總ての人々に「行き渡」らざるかの理由を十分に了解せんを欲するならば、吾人は先づ其の前に、仕事及び食物が現在の如くに行渡れるは何故なるか、といふ未だ明白ならざる問題の解決に努めざる可からず。而して、若し吾人にして或組織の存する事を認むれば、次に起る問題は、其は果して「如何なる組織なりや」と云ふ事なるが、其は單に「國家」(the state)のみに非ざるは明かなり。現時にありては、凡ての制度が國家の認むる範圍内に存在し、常に國家に依りて決定せられ左右せら

る、を見慣れたるが故に、吾人は動もすれば、凡て此等の制度は國家より發生したるものにして、其の起原及び發達は國家の存在に基くものなりと考ふるの傾あるに至れり。然れども此は誤なり。經濟的諸制度の中には、少くも吾人が今日使用する意義に於ける國家よりも一層古きものもあり、又國家の擁護よりは寧ろ其の禁制の下に於いて發生し發達したるものもあるなり。加之、全世界に亘りて行はれ、又は少くも現在及び過去のあらゆる國家よりも遙かに廣き地域に亘りて行はれたるものもあり。されば、現在の經濟的組織の基礎たる諸制度中最も重要なものを論ずるに當りては、國家は之を第三となし、第一及び第二として先づ家族並びに財産を論ずるを以て最も便利とす。

往々吾人は、家族制は既に近代の經濟組織に於いて全然、個人制に依り代位せられたるかの如く言ふことあり。されども此は全く誤解にして、地

球上の人口の少くも三分の一は獨立 成人といふ意味の個人には非ずして、年長者が未だ其の任意行動を許すを得ずと認むる幼者より成立するものなる事を忘却せるの結果なり。幼者が實際に行ふ仕事は左して重要なるものに非ざるは事實にして、假令總ての幼者の勞働が一年の間全然廢止せられたりするも、之が爲に世界の被むる損害は左して多からざらん。然れども、幼者其者は實に永久的の重要を有するものなり、何となれば、幼者は成人の唯一の補充者たる者にして、又幼少期は人類の大多數に取りて、其人が勤勉者となるか怠惰者となるか、又働くべきれば如何なる仕事に従事すべきか等が、其間に定めらるゝ大切な時期なればなり。男女の大多數の者が勤勉の慣習を得たるは、其の幼少期に於いて、彼等の上に行はれたる家族の勢力に依り、働く様に説得せられ又は驅りやられたるが故なり。此等の勢力は勿論種々雜多にして、或は母

の接吻によりて表はされ、或は父の鞭に依りて表はされ、或は兄弟の嘲弄となりて現はれ、或は飢へたる幼兒の泣訴となりて現はる、等、其發現は一ならざれども、概して此等の家族的勢力は甚だ有力なるものにして、現に今日の國家は、兒童の過度の勞働を防がん爲に、多くの規則を設け多くの監視員を使用するを必要とする程なり。而して幼時一度得たる勤勉の慣習は常に永く成年期にも存続するものにして、此は、成年時に於ける怠惰は、順當の家族的感化を偶然に缺きたるに因る場合甚だ多きに徴しても明かなり。又一定の人を或一定の職業に配置するこゝも亦、通常は家族の内部に於いて決定せらるゝものなり。成長せる男女が其の職業を選択し、且何回にても其の欲するまゝに之を變更するは、法律上各人の自由に屬するこゝ疑なし、乍併、かゝる法律上の自由は、幼少期の終りたる後にありては、普通は左して有用なるものにあらず。若し、親

が子供の爲に職業を選ぶに當りて、其子が已に經驗を備へたらば自分で選ぶべき所を、全く同一の選擇をなすものならば、家族の勢力なるものは左したる影響を有するこゝなかるべし。然れども、此假定は實際を離るこゝ甚だ遠きものにして、實際にありては、親は其の子が若し自己に最も有利なるものを選ぶの能力及び知識を完備し居たらば自ら採擇すべき所の其職業を選定し與ふるの能力無き場合多く、又縦ひ斯かる能力を有する場合に在りても、往々親は子が斯かる職業に従事するを欲せざるの事實あるか故に、人々が種々なる職業に配置せらるゝに就いては、家族勢力甚だ重要なものありと言ふ可きなり。

家族制が人口を左右すといふ事は、一見すれば經濟學上の命題たるよりも寧ろ生理學上の眞理なるが如し。乍去、家族の經濟的協同が出生數並びに幼少後の生殘者の數に重要な影響を有するものなるは否むべ

からず。されど其影響は精密に如何なるものなるか、又それは如何に作用するものなるかは、現在にありては甚だ不明にして、本書の如き小篇に於いて之が説明を試むるは無用なるべし。

吾人は、之れより進んで、現時に於ける三大經濟制度中、第二のもの即ち財産制を論ぜん。余が茲に之を個人財産と稱せざるは、財産の中には人々の團體（國民以下大小種々の大きさの團體）の財産たるもの甚だ多ければなり。或は之を個別財産 (separate property) と稱するも不可無ければなり。或は往々にして個人財産と混同せらるゝが故に誤解を生ずるの虞あるのみならず、元來財産なる觀念は、人類が總ての物を共有する場合に於ては殆んど無用の觀念たるべきが故に、財産に冠するに「個別」なる語を以てするも、餘り意味を成さざるの虞もあるなり。

吾人は如何に遠く過去に溯りて考ふるも、動産について個人的財産權の存せざりし時代を想像するとは殆んど不能なり。或は單純なる事情に依り、或は一定の權力的決定に依りて、人々の間に分配されたる、分捕品又は生産物の分け前に對する個人の「權利」なるものは、何等か秩序ある社會なるもの、最初の始まりに於いて已に承認され居たるものなり。而して武器及び道具にして使用せらるゝに至らんか、必然の結果として、或人は或武器又は道具を使用し、他の人は他の武器又は道具を使用するの習慣を生じ、又各人は「自己の」武器、「自己の」道具と稱するに至りたるものをば、他人が使用するを憤ることとなり、且公平なる傍觀者は其人に同情するに至るべきなり。吾人は今日何れの育兒院に於いても之が實例を見るを得べく、而して吾人は其實例より、公衆の同情及び其の結果たる「權利」の一般的承認は、慣習の尊重、即ち相當の理由なくして物の所有者を

變更することに對する人類固有の嫌忌より生ずるものなる事を推測するを得べし。此は兒童等が成人の有する財産の觀念に感染したる結果なりと言ふを得ず、何こなれば、其等の物の全體は、之を成人より見んか、凡て兒童の兩親に屬するものを見做さるゝものなればなり。

人々が或住居を有し又多少にても秩序を重んずるに至る時は、之と同時に、住居に關しても亦右に同一の感情起らざるを得ず。一夜たりとも或洞窟又は藪叢の中に心地よき寢褥を得たる者は、翌夜歸り來りて其が他人に占領せられ居るを見れば、他の洞窟が同じ様に占領せられ居る場合に比し、憤ること多かるべし。况んや已に幾夜も平穩に之を保有したる場合には、彼は之を怒ること一層多かるべく、又已に多少なりとも慣習に對する一般の尊重が發達し居る場合には、彼は之に就いて局外者の同情を得んこと必せり。此の如きは、其占有が、箇人による場合たること、家

族又は之よりも大なる團體による場合たることを問はず、其間何等の差異無かるべき筈にて、即ち横領されたる團體に對しても亦、横領されたる個人に對するに同様に、一般の同情を惹起すべきなり。

以上述べたる所と異り、土地に關する財産權の觀念に至りては、其起源さまで古からず。即ち、原始人類の如きは、その土地に對するや、恰かも今日の人類が海洋に對するに殆んご同様の關係に在りたるものなり。人口は稀薄にして土地は有り餘りたるが故に、土地の使用に關しては、人々相互の間に於いて何等目立ちたる不便を起すの虞無かりしなり。然るに、其後人口の増加に伴ひ、同一區域に住み互に相交通して一個の團體を成しなしつつある人々は、平素彼等が其の彷徨區域を爲して自ら「自分等」の狩獵地を呼び慣れたる地方に、外人の侵入し居るを見るときは、之によりて威嚇を感じ、随つて又之を憤ふるに至れり。されど、土地に關

しては、局外者の同情の起り得べき可能は、動産に關する場合よりも甚だ少かりき。即ち、其争は一方は侵略をなさんとする團體ミ、他方は之に反抗せんとする團體ミ、此二團體の間に限られ、此等二つの團體以外の者の意見は、遠くして影響するに及び難く（交通の便より考へて）又恐らく誤報もあり勝ちにて、言語の相異なる場合の如きは殊に然りしなるべし。加之、争の原因其のものも甚だ簡明なるものには非ざりき。蓋、特定の弓又は槍を携ふるを常習し、又は特定の洞窟又は家屋に住むを常習したるもの、果して何人なるかは、之を決するこゝ通常さして困難ならざれども、或特定の谷又は特定の山邊に狩獵するを常したる團體は、果して何れの團體なるかを決定するが如きは、多大の困難起り易かるべし。されば争論は頻繁に起りたれども、之が解決は只關係兩國體の暴力の試合に依るの外なかりき。而して、若し一方が決定的勝利を

得たる時は、その結果往々にして被征服者の合體ミなり、二つの領土は併合せられて一領土ミなり、斯くて從來よりも大なる領土が、一箇の權力の下に、あらゆる侵略者に對抗して保持せらるゝに至るとあるものなり。二つの領土が一つに併合せられたりとも、之が爲に其全領土は、必然的にも又蓋然的にも、一個の財産たるべき結果を生ずるものには非ずして、寧ろ舊境界線又は之を一層正確にしたる境界線が其まゝ保有せらるゝ場合多く、又或場合には全く新たな領土の區分を行ひ、之に依りて、各々或從屬的權力の下又は其他の方法に依り互に結合せられて他ミ區分せらるゝ幾多の小團體の爲に、土地使用の便宜を講ずるこゝもあり。此等の各小團體の保持する土地は、今は一個の權力の下に統一せられ居る諸團體全體の土地が「彼等のもの」なることは、稍々異なる意味に於いて彼等のもの」なり。即ち、其全體の土地は彼等の國 (country) 即ち領土 (territory)

事なると同時に、各團體の有する土地は彼等の財産なり。

土地財産と領土との間の區別が會得せらるゝに至りたるは遙かに後の事にして、今日にありても尙、或獨立國に依りて行はるゝ領土獲得が問題なる場合には、殆んど此區別を理解せざる人多し。然れども、征服又は其他の領土獲得に際して之と同時に其土地に於ける土地所有者の權利をば全然取上ぐる事已みたる以來、此區別は事實上認めらるゝに至りたり。

斯くて、從來は各々武力に依りてのみ外來の侵畧を防ぎ居たる小團體の領土は、今や合併せられて大領土の一部となり、其全體を支配せる主權の承認に依りて、之が合國財産たることしつゝありしものなるが、之と同時に他方に於いては、土地財産權の觀念は、小團體の占有せる地域の内部に於ける事情の變化に基き、別種の方向に向つて次第に其勢を増すに至りたり。蓋、家の敷地が、若干の庭園と共に、他人に依りて其の

占有を妨害せらるゝと無き「權利」の目的物として、家其もの同一の觀念に支配せらるゝに至るは當然にして、實際上家其の敷地は之を區別するこゝ困難なり。されば、人々は早くより其の住居 (homesteads) をば「自己のもの」として考ふるに至り、又單り外人に對してのみならず同一團體の内の他人に對しても、其地位の維持に關して團體の權力の保護を受くるに至れり。然れども團體内に於ける其他の土地に關しては、當初より此の如き觀念起りたるに非ず。土地は多く人は少ければ、或特定の地積を以て専ら自己の占有に屬するものとなし隨つて他人の觸るべからざる土地なりと主張せるが如き人又は家族は、恐らく之無かりしならん。狩獵に出でゝは、獲物の見付かるがまゝに、何人も到る所に彷徨せんことを欲すべく、又牧畜のため其の畜群を放つに當りては、牧草の見出さるゝがまゝに、何人も到る所に行くを得べしと考へたるならん。豈嘗に

狩獵ミ牧畜ミのみならんや、農耕の如きも、元ミ相當の人数より成れる團體の人々が之を共同に行ひ、其間何等甚だしき組織上の難問題に遭ふこと無かりしものなり。然るに其後、時の経過するに従ひ、箇人及び其の子孫に對し、土地の耕作のため一定の土地の永久的占有を許すことが、實際上便利ミ認めらるゝこと、爲り、斯くて遂には牧地までも、今日英國にて「共用地」(commons)として知らるゝが如き少數の例外を除きては、盡く分割せらるゝに至りしものなり。

財産權の歴史を概論することは、漠然たる假說的のもの、外は、猶不可能なり。近來行はれたる多くの説の如何に缺點多きものなるかは、レウインスキー氏の著「財産權の起原」(一九一三年出版) (Mr. Jan St. Lewinski's Origin of Property, 1913) に就いて之を見るべし。

財産權の制度は、箇人的なるを將た「團體的」なるを問はず、孰れも

破壊的行爲を防ぐこと、及び生産的行爲を行ふを以て人々の利益たらしむること、の双方に依りて大に人々の物質的福利を増進したり。吾人にして若し、相接觸して生活せる人類の間に財産制なき場合を想像するを得んか、吾人は之に依りて、箇人の利己の追求は勿論のこと、團體が團體として其の共同利益を追求することさへも、財産制なくしては、その物の生産よりも寧ろ破壊に導くものなる事を知るに足るべし。蓋、財産制にして存在せざらんか、各個人の利益又は團體の利益は、箇人又は團體を導きて只其の欲求を充すに最も簡易なる手段を探るに至らしむべし。即ち彼等は、何物にても其の欲するものを得るには、何所にても只之を發見したる所にて、又何時にても只之を欲したる時に、之を取得するに止まらん。豫め之を取得し置くも、財産權にして存在せずせば、更に他人の爲に之を奪ひ去らるゝことあるべきが故に、畢竟無用に歸すべく、

所詮、一定の物を確實に取得する唯一の方法は、唯他人に卒先して之を取
得し且消費するの外無かるべし。斯かる制度(否寧ろ制度の不存)は、唯、
人類の數少く、有用の天産物甚だ豊富にて、且人類の欲望は狩獵物・魚類・其
他使用に先ちて準備を要せざる僅少の物に限らるゝ場合に於いては、或
は行はれ得るとありこするも、事情苟くも然らざる場合に於いては、各
人又は各團體が、出來得る限り簡易なる方法にて其の欲求を充さんこ努力
する事は、必ずや不幸なる結果を齎すべし。獵獲すべき獸類が極めて夥
多ならざる以上、濫獲の爲、殊に生育季に於ける濫殺のため甚だしく其
の數を減少せしめ、終には之を絶滅するに至らん。又人類の欲望する植
物も、極めて豊饒なるに非ざれば、人皆之を得んこ欲して、今日英國に
於ける都會附近の路傍に生ずる黒莓も同様、十分の成熟を待たずして悉
く之を摘み去るべし。斯くては、自己の行動及び其生産物をば他人の目

より隠蔽し得るとの確實なる場合の外は、何人も將來の爲に貯へをなし、
材料の準備をなし、又は道具其他の設備を爲す者無きに至るべし。

然るに、一旦財産權にして確定せらるゝに至らば、人々及び團體は、他
人に妨害せられては之を行ふの甲斐なき種々の生産的活動をも、新たに
之を企つる事を以て其の利益を認むるに至らん。斯くて、土地の所有者の
如きも(箇人たるを團體たるを問はず)、出來得る限り無駄を少からし
むる様に土地の使用を講ずることを得べきなり。

一見すれば、財産權は、結合的勢力たるよりは寧ろ分離的勢力にして、
そは人々の間に別異の利益を設定することに依り、人々を相離反せしむ
るものたるに似たり。然れども實際は然らずして、財産權は協働を餘儀
なくし、且之れを行ふことを容易ならしめ、以て人々を結合するものな
り。少くも、極めて巨大なる土地財産を有する場合に非らざる以上、財